

志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(29)

国民宿舎ダグリ荘建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

飯 盛 山 古 墳

2001年3月

鹿児島県曾於郡志布志町教育委員会

序 文

本町は埋蔵文化財包蔵地が多く、「縄文銀座」と証されるとおり、縄文時代の遺跡を中心に前川、安楽川沿いに約200か所以上の「周知の遺跡」があります。

これらの遺跡は、農業基礎整備事業あるいは宅地開発等の開発行為により、確認調査等が実施され、貴重な資料を提供するとともに、遺跡の性格が解明されつつあります。

本書は、志布志町夏井牟田地内における国民宿舎ダグリ荘建設事業に伴う飯盛山古墳の発掘調査の報告書であります。

飯盛山古墳は、昭和38年のダグリ荘建設に際して、消滅したと考えられていました。

しかし、先行事業に伴う確認調査によって飯盛山古墳が残存していることが判明し、今回の事業に際して発掘調査が行われました。

ここに、その調査結果を報告書として刊行いたしますが、この報告書が広く文化財保護並びに学術研究の一助となれば幸いです。

発刊にあたり指導者や作業協力者の皆様、また調査に御協力いただいた作業員の皆様、並びに関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成13年3月

志布志町教育委員会

例 言

- 1 この報告書は、志布志町による国民宿舎ダグリ荘建設工事に伴う飯盛山古墳の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、志布志町教育委員会が調査主体となり実施した。
- 3 調査における実測及び測量、写真撮影は、主に小村が行った。また葺石の測量については、(株)埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
- 4 調査の実施にあたっては、鹿児島県教育庁文化財課の指導・教示を受けた。
- 5 本書に用いたレベル数値は、すべて海拔高である。
- 6 遺物番号については、通し番号とし、挿図、図版とも一致している。
- 7 出土遺物は、志布志町教育委員会で一括保管し、公開展示する予定である。
- 8 本書の執筆及び編集は小村が行った。

本文目次

序文
例言
目次

第 I 章 調査の経過	1
第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 調査の組織	1
第3節 調査の方法	1
第4節 調査の経過	2
第 II 章 遺跡位置・環境及び周辺遺跡	5
第 III 章 発掘調査	8
第1節 層位	8
第2節 調査の概要	8
第3節 検出遺構	14
第4節 出土遺物	14
第 IV 章 まとめにかえて	29

挿図目次

第1図 志布志町内古墳位置図	4
第2図 飯盛山古墳墳丘測量図	6
第3図 小牧古墳群1号墳墳丘測量図	7
第4図 基本土層模式図	8
第5図 第1・2畦畔土層断面図	9
第6図 第3・4畦畔土層断面図	11
第7図 調査対象範囲図及びトレンチ配置図	13
第8図 根石列実測図（平面図／立面図）	15
第9図 出土埴輪実測図（1）	17
第10図 出土埴輪実測図（2）	18
第11図 出土埴輪実測図（3）	19
第12図 出土埴輪実測図（4）	20
第13図 出土埴輪実測図（5）	21
第14図 出土埴輪実測図（6）	22

第15図	出土埴輪実測図 (7)	23
第16図	出土埴輪実測図 (8)	25
第17図	出土遺物実測図 (1)	26
第18図	出土遺物実測図 (2)	27

表 目 次

第1表	出土遺物観察表	28
-----	---------	----

図 版 目 次

図版 1	古墳遠景 (東から)・古墳遠景 (西から)・葺石検出状況 (選定前/北から) 葺石検出状況 (選定中/北から)	35
図版 2	根石列検出状況 (北から)・ミニトレンチ設定状況 (北から)・根石列検出状況 (南から)・根石列検出状況 (東から)・第7 T (南から)・第7 T (北から)	36
図版 3	出土埴輪 (第9・10図 1～8)	37
図版 4	出土埴輪 (第11・12図 9～16)	38
図版 5	出土埴輪 (第13図 17～21)	39
図版 6	出土埴輪 (第14・15図 22～29)	40
図版 7	出土埴輪 (第15図 30～41)	41
図版 8	出土埴輪 (第16図 42～50)	42
図版 9	出土遺物 (押圧痕等拡大)	43
図版10	出土埴輪 (第17・18図 51～62)	44

第 I 章 調査の経過

第 1 節 調査に至るまでの経過

鹿児島県教育委員会（以下、県文化財課）では、県下の市町村教育委員会と連携し、文化財の保存・活用を図るため、各関係機関との間で、事業地区内における文化財の有無及びその取り扱いについて事前に協議し、諸開発との調整を図っている。

この事前協議制に基づき、志布志町（まちおこし課）は、志布志町夏井字牟田地内における、国民宿舎ダグリ荘建設工事の計画策定にあたり、実施計画区域内の文化財の有無について、志布志町教育委員会（以下、教育委員会）に照会した。

教育委員会では、平成7年度に実施した国民宿舎ダグリ荘改築工事（浴室改築）に伴う確認調査によって、当該事業区域内に飯盛山古墳が残存していることを報告した。

これを受けて、町当局と教育委員会で事前協議した結果、教育委員会としては、今回のダグリ荘建設工事にあたり、発掘調査面積縮小のため、既存施設内から新設建物が出ないように設計してほしいと要望した。

しかし、町当局としては、既存施設の北側については現地保存が可能であるが、南側の部分については現地保存が難しく、事業実施前に発掘調査をしてほしいとの回答であった。

そこで教育委員会では、平成10年10月より残存している古墳の記録保存を主目的とする発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は、志布志町教育委員会が主体となり、県文化財課及び県立埋蔵文化財センターの指導・助言を得て実施した。

第 2 節 調査の組織

調査主体者	志布志町教育委員会		
調査責任者	"	教 育 長	早 水 秀 久
調 査 調 整	"	社会教育課長	渡 辺 純 幸
調 査 事 務	"	" 係長	恒 吉 修 二
	"	主 査	濱 田 優 子
	"	主 査	小 村 美 義
	"	主 事	坂 元 正 知
	"	主 事 補	下 出 克 也
調査担当者	"	主 査	小 村 美 義

第 3 節 調査の方法

発掘調査は、残存している古墳が今回の建設工事によって削平される部分を中心に、記録保存を主目的として実施した。

現地の状況では墳丘が明確でなかったため、場所によっては、随時、合計7か所の試掘トレンチ（以下、T）を設定し、その範囲の把握に努めた。

表層である I 層については、昭和38年の建設工事による客土であることが、確認調査（平成7年度実施）で判明していた。

第4節 調査経過

発掘調査は、平成10年10月21日から平成11年2月3日まで実施した。その調査経過については、日誌抄をもってかえることとする。

【10月21日～10月30日】

文化会館から発掘用具の運搬後、点検、確認。作業員への調査方法、調査上の留意点等を説明した後、発掘調査を開始した。

調査対象地区の現況は、既存建物周辺を中心に植栽がなされており、概ね、北側から南側に向かった急傾斜であった。

西側から東側へ1～4、北側から南側へA～Dとし、1-A区、1-B区、1-C区、1-D区、2-A区、2-B区……と呼称する5mのグリッドを設定した。畦畔については、5m間隔を基本としながら、合計5か所を設定した。

北側の建物周辺については、通路、花壇として利用されており平坦面であった。この部分については削平が著しく、表土を掘下げると直下が地山（黄白色火山灰土）であった。

調査区南側についても、植栽がなされており、部分的に攪乱を受けていたが、現地が急傾斜であったためか、墳丘のごく限られた範囲が残存していた。

層位は、昭和38年の建設工事の廃土による客土が厚く（最深約2m）堆積していた。この客土から出土した埴輪片については、一括資料として取扱った。

【11月2日～11月30日】

厚い客土を掘下げていくと、大正火山灰（P-1）を包含する暗黒灰色土に達し、部分的に外表施設である葺石が検出される状況であった。しかし、この層から検出される葺石の大半が、工事等により築造時の現位置をとどめていなかった。

継続的に掘下げると黒色腐食土となった。この層から葺石とともに、多数の埴輪片を検出した。

葺石に利用している石は、そのほとんどが砂岩であり、角礫は少なく円礫がその主体を占めていた。また、数は多くないが板石状の石も利用されていた。

墳丘端部を明確にするために、1～5のTを設定し、掘下げを開始した。

墳丘西側の前方部端部を、明確にするために設定した、4・5 Tでは、築造時の明確な地山の削出し、盛土（版築）の様子を確認することはできなかった。

また、1～3 Tも同様の結果であるとともに、周濠についても認められなかった。

調査区から検出した葺石の実測作業に着手した。また、等高線作成作業は20cm間隔で、3回にわたり実施した。しかし、西側前方部端部が削平されていたため、明確な前方部の墳形を把握するに至らなかった。

検出した埴輪片については、1mメッシュを設定後、メッシュ毎に遺物の取上げ作業を実施した。

県立埋蔵文化財センター調査課 文化財主事 中村耕治氏指導来跡。(11月30日)

【12月1日～12月25日】

葺石実測作業を継続するとともに、畦畔の土層断面実測を着手した。今回の調査対象区域の急傾斜地のほぼ全域で葺石が検出されたが、ほとんどの葺石については、自然崩落等によって、築造時の現位置をとどめていないことが推測された。しかし、部分的に根（基底）石と考えられる根石列を検出した。

根石には大きな石（最大直径 約60cm）が利用され、現状で1段積み上げられており、比較的大きな石と大きな石の空白部分を、人頭大の石（最大直径 約30cm）を差込んで埋める部分や、墳丘斜面に板状の石を貼付けるように配する部分が認められた。また、埴輪片は根石周辺に大きな破片が集中する傾向も認められた。

鹿児島大学 法文学部教授 上村俊男氏指導来跡。(12月22日)

【1月7日～2月3日】

葺石実測作業を継続した。各Tの土層断面実測作業を実施した。

浴室北側について、現況把握を目的とした等高線作成のための掘下げを開始した。また、建物北側の状況把握のために6・7 Tを設定後、掘下げた。6 Tの掘下げの結果、北側の西側前方部端部についても削平を受けており、墳丘が残存していないことが判明した。しかし、7 Tを設定した部分については、墳丘が若干残存していることが判明した。

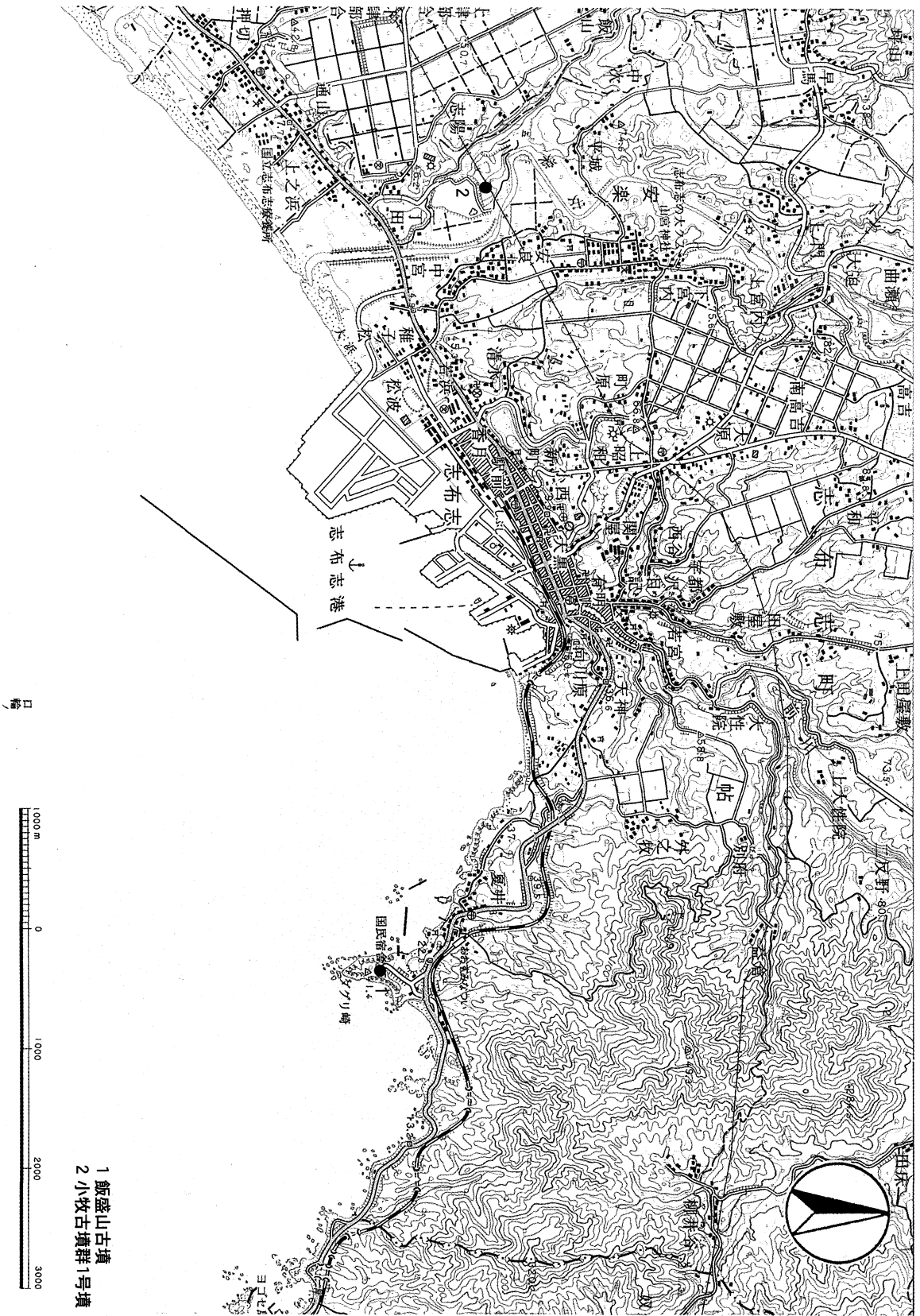
調査区南側について、葺石実測作業終了後、根石を1mメッシュ毎に取り上げた。1～3 Tについては延長し、断面削り出しを行うとともに、他の埋葬施設検出の可能性もあるため、詳細に遺構検出作業を実施したが、認められなかった。

また、西側前方部端部の平坦面に、他の埋葬施設の可能性が指摘されたため、注意深く遺構検出作業を実施した後に、幅50cmの小トレンチを設定し、掘下げを行ったが検出できなかった。

今回の発掘調査対象地区より出土した葺石については、産地検証のため埋蔵文化財収蔵整理作業室にすべて搬入した。全行程が終了したため撤収した。

県文化財課 文化財主事 堂込秀人氏指導来跡。(2月1日)

第1图 志布志町内古墳位置图



第 II 章 遺跡位置・環境

【飯盛山古墳】

飯盛山古墳は、志布志町夏井字牟田地内のダグリ岬で、標高約50.2mの丘陵の頂きに残存している。昭和38年の国民宿舎建設工事によって、そのほとんどが消滅したものと考えられ、墳丘が認められず原形をとどめていない。

本古墳は、全長約80mの前方後円墳⁽¹⁾であったとされ、古墳の主軸は、前方部をほぼ西に、後円部をほぼ東に向けた、東西方向である。墳丘高は、後円部で約4.5m、前方部で約1.5mを有し、前方部が低く平坦になっていたとされる。墳端があまり広がらない、ほぼ長方形に延びた形が予想されており、墳形は柄鏡式の前方後円墳と想定されている。さらに、飯盛山古墳を主墳として陪塚があったと伝承されているが、現時点では確認されていない。

日本考古学協会 故 瀬戸口望氏によると、石室は後円部の頂上にあり、長さ約180cm、幅約90cm、高さ約90cmの竪穴式石室だったとされる。また、石室構造は栗石積みで板石積みではなかったとされる。

昭和38年の国民宿舎建設工事⁽²⁾の廃土の中から、壺形埴輪とともに、ガラス製勾玉、丸玉、小玉が表採されている。

【小牧古墳群 1号墳】

小牧古墳群 1号墳は、志布志町安楽字小牧地内の標高約51mの小牧台地に所在している。

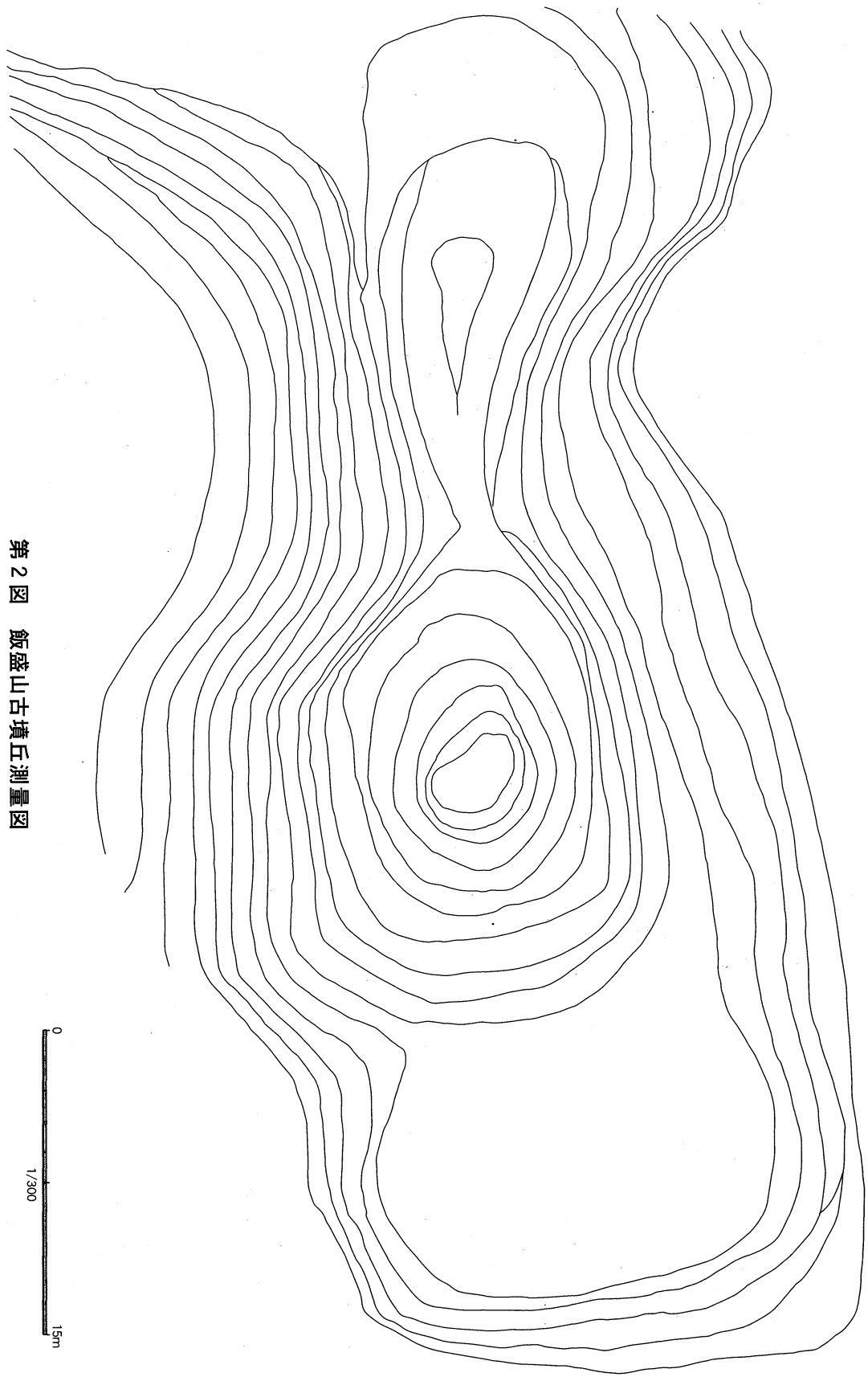
全長約40mの前方後円状の古墳とされ、古墳の主軸は、前方部を北北西に、後円部を南南東に向けた南北方向である。最大幅約15m、高さ約2.5mを測るが、前方部と後円部の比高差は認められない。前方後円墳と想定されているが、一見双円墳状⁽³⁾である。

小牧古墳群 1号墳は、昭和57年の工場用地整備事業の工事中に発見され、この造成により後円部の一部が削平されている。削平部分の断面観察では、部分的にシラスを利用した盛土（版築）と周濠状の掘込みが確認されている。（地山削出し後、版築した様子がみえる。）このことから、周濠をもつ高塚古墳の可能性は考えられる。

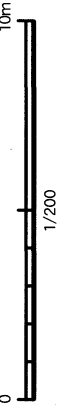
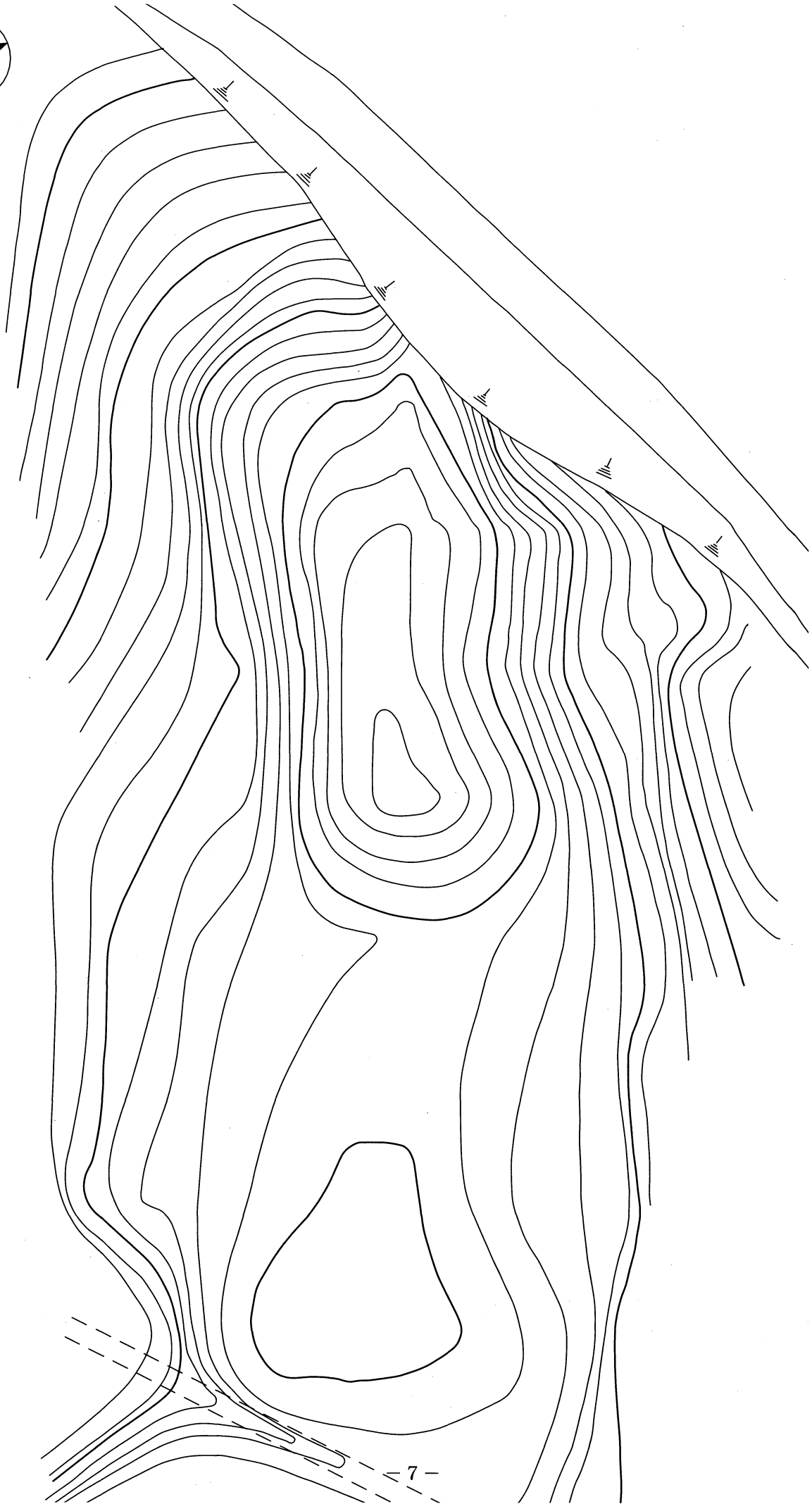
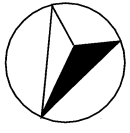
また、墳丘上では葺石の一部とみられる自然礫⁽⁴⁾、軽石、土師器、須恵器等の遺物が表面採取されている。表面採取された遺物から6世紀前半の築造が想定されている。

さらに、小牧古墳群 1号墳の周辺に3つの円墳（2～4号墳）が存在するとされ、興味深い。

- (1) 土木業者によって作成された測量図から、前方後円墳であったと想定されているが、他方、前方後方墳の可能性も指摘されている。
- (2) 昭和38年の国民宿舎建設工事に関わった関係者の話によると、基礎工事時、「“底のない壺”（壺形埴輪）をたくさんみつけたが、もって帰っても使えないので割った。」ということである。このことから、その当時、壺形埴輪は壺と認識できる状態で、多数墳丘上に残存し、古墳の比較的広い範囲に置かれていた可能性は高いと想定できる。
- (3) 前方後円墳と想定されているが、他方、前方後円墳の築造された時代観から、やや疑問が残るため、前方後円墳ではない可能性も指摘されている。前方後円墳ではないと仮定しても、大きな円墳なのかは発掘調査等が実施されていないため、判然としない。
- (4) 上述の削平部分の断面観察では、葺石は発見されておらず、古墳の外表施設が葺石なのかどうかは明確ではない。



第2図 飯盛山古墳丘測量図



第3图 小牧古墳群1号墳墳丘測量図

第Ⅲ章 発掘調査

第1節 層位

飯盛山古墳は、志布志町夏井字牟田地内のダグリ岬で、標高50.2mの丘陵の頂きに残存している。昭和38年の国民宿舎建設工事によって、そのほとんどが消滅したと考えられ、明確な墳丘が認められず、原形をとどめていない。しかし、建設工事前に土木業者によって作成された測量図を参考にすると、今回調査対象となった地点は、前方後円墳の前方部南側付近になると考えられる。

現況は、北側から南側に向かって急傾斜となり、自然地形が谷に至る部分である。このため、場所によって層の堆積状況がかなり変化している。

本古墳は地山整形後、上面は盛土（版築）して築造された古墳ではないかと、従来から指摘されていた。調査の結果、築造のための明確な盛土は認められなかったが、段築を想定させるテラス面は認められた。

I層：客土である。昭和38年の国民宿舎建設工事に起因すると考えられる層である。いずれも軟質土でかなり厚く堆積しており、色調等により数層に細分できる場所も存在する。

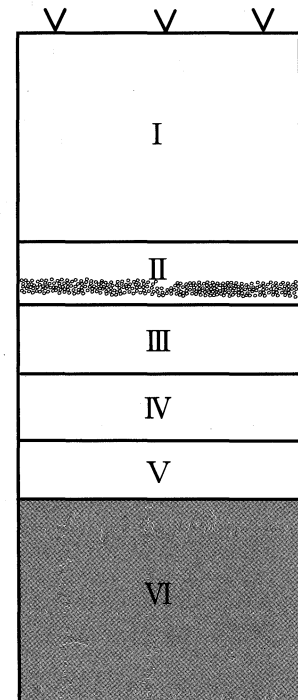
II層：暗黒灰色土。軟質土である。灰白色の大正火山灰（P-1）を包含する。場所によっては認められないが、部分的に薄く堆積している。

III層：黒色腐食土。葺石、埴輪片が出土する層で、フカフカしている。

IV層：茶褐色土。縄文時代早期相当層。若干硬質である。場所によっては認められない。調査区の西側を主体として部分的に堆積している。

V層：黄茶褐色土。粘質の強い層で「チョコ」と呼ばれている。（調査区の西側を主体に堆積）

VI層：黄褐色火山灰土。始良カルデラの噴出物（降下軽石を含む。）である。流出しやすい特色をもつ。「ヌレシラス」と呼ばれている。



第4図 基本土層模式図

第2節 調査の概要

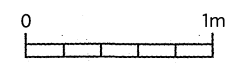
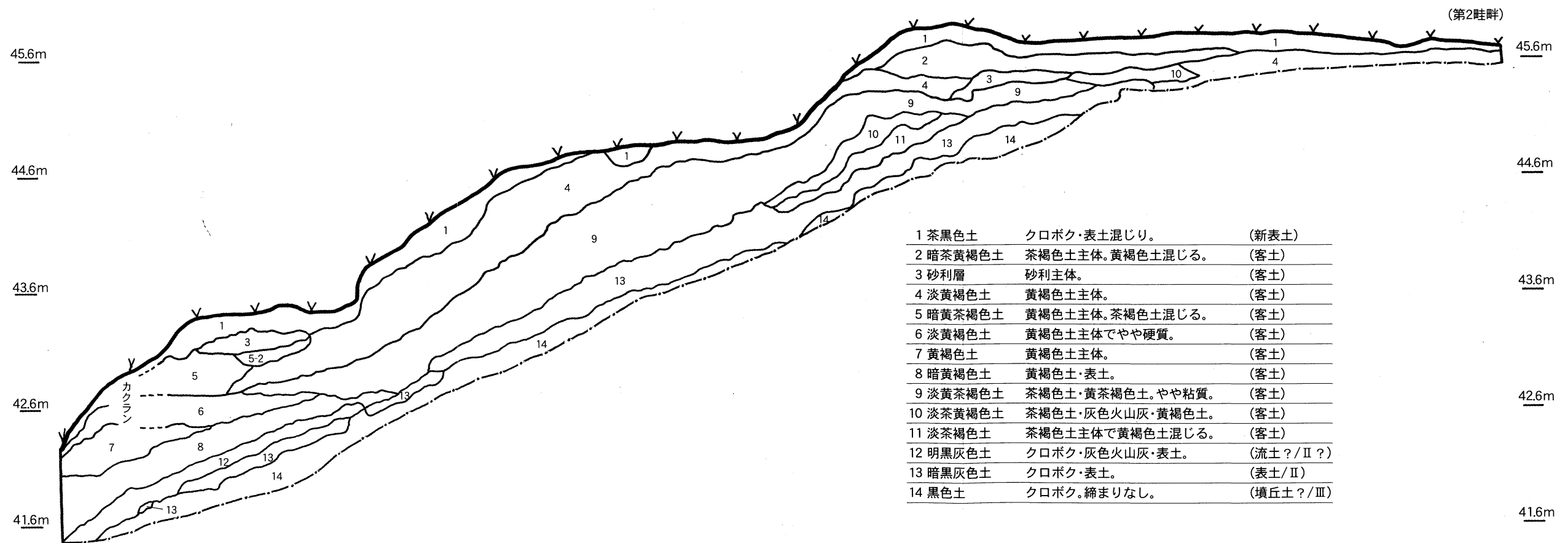
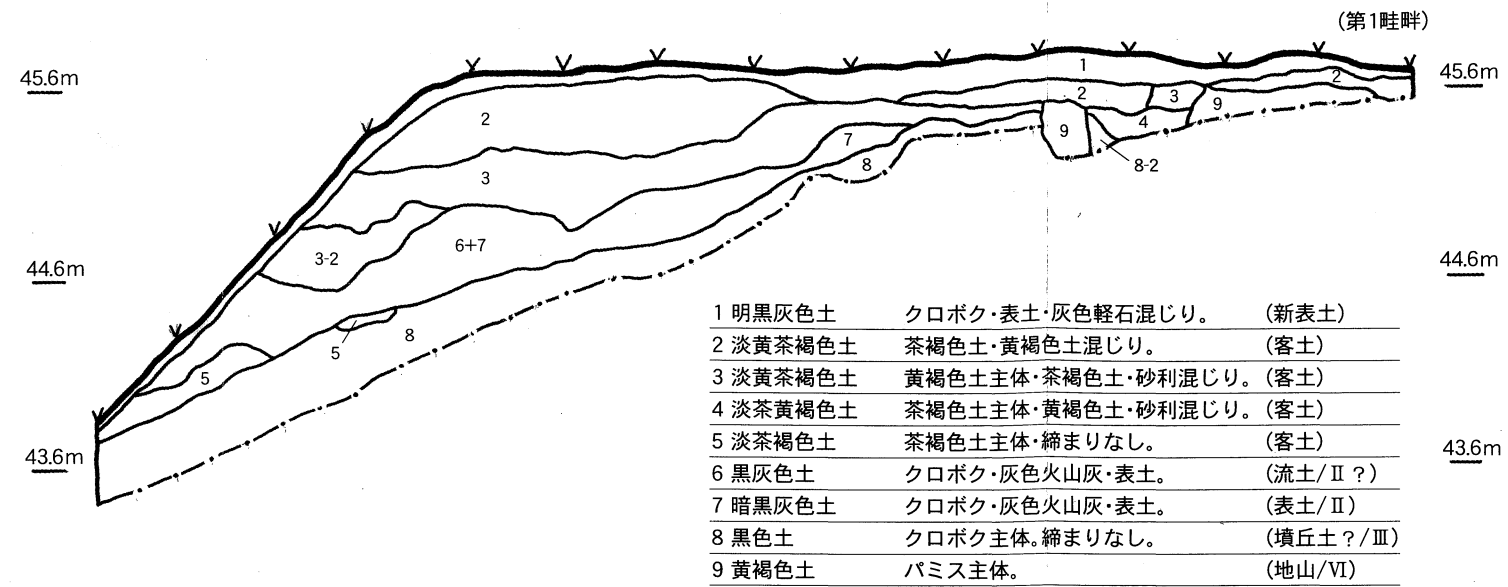
今回の調査対象となった部分は、前方後円墳の前方部南側と考えられる地点であった。

そこで、南側の墳丘端部、周濠確認のため、1 T（1×5m）、2 T（1×10m）、3 T（1×4m）を設定した。また、西側の前方部の墳丘端部を突止めるため、西側に4 T（1×12m）と5 T（1×11m）を設定した。

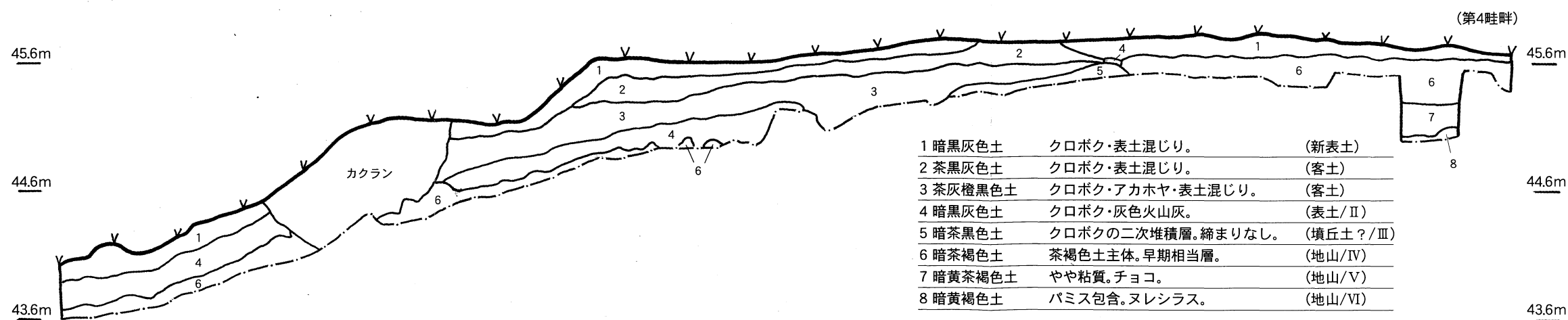
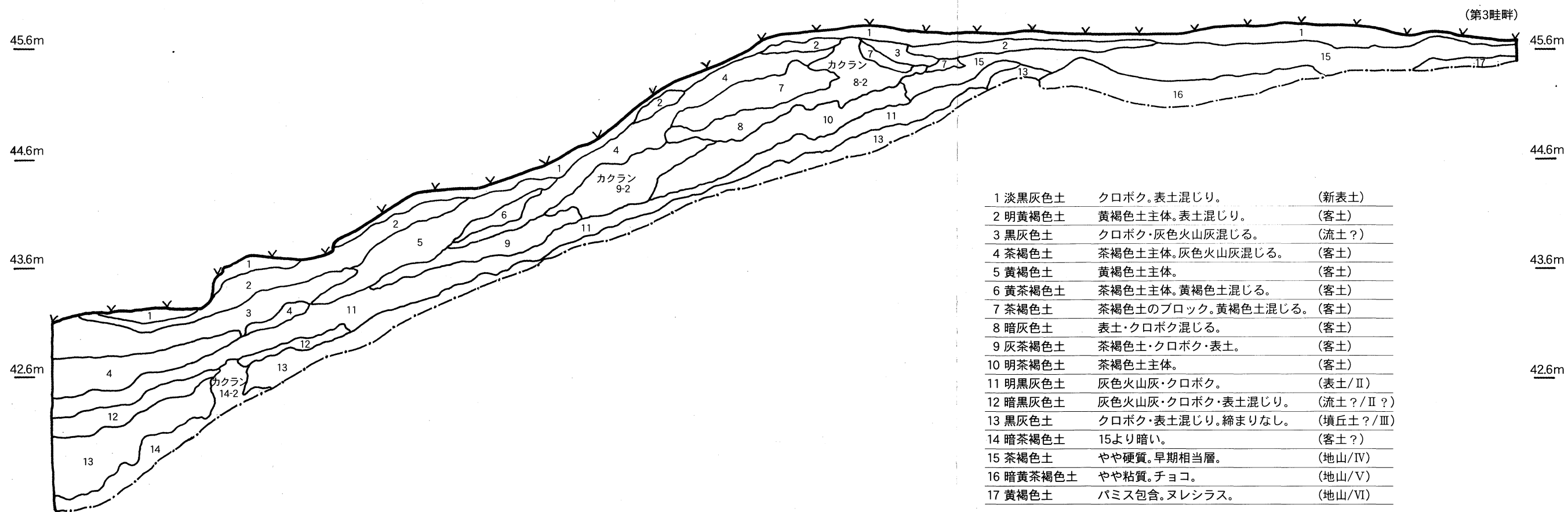
今回の調査対象区域外である北側部分についても、墳丘端部を確認することを目的として、6 T（1×10m）、7 T（1×6m）を設定した。

発掘調査を実施した部分については、多数の埴輪片とともに、根石列（最大延長9.1m、最大幅1.6m）を検出した。また、北側の6・7 Tでも葺石、埴輪片、根石列を検出した。

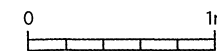
外表施設である葺石は、北側の6・7 Tの調査結果から、前方部の広い範囲で葺かれていることが推測できた。

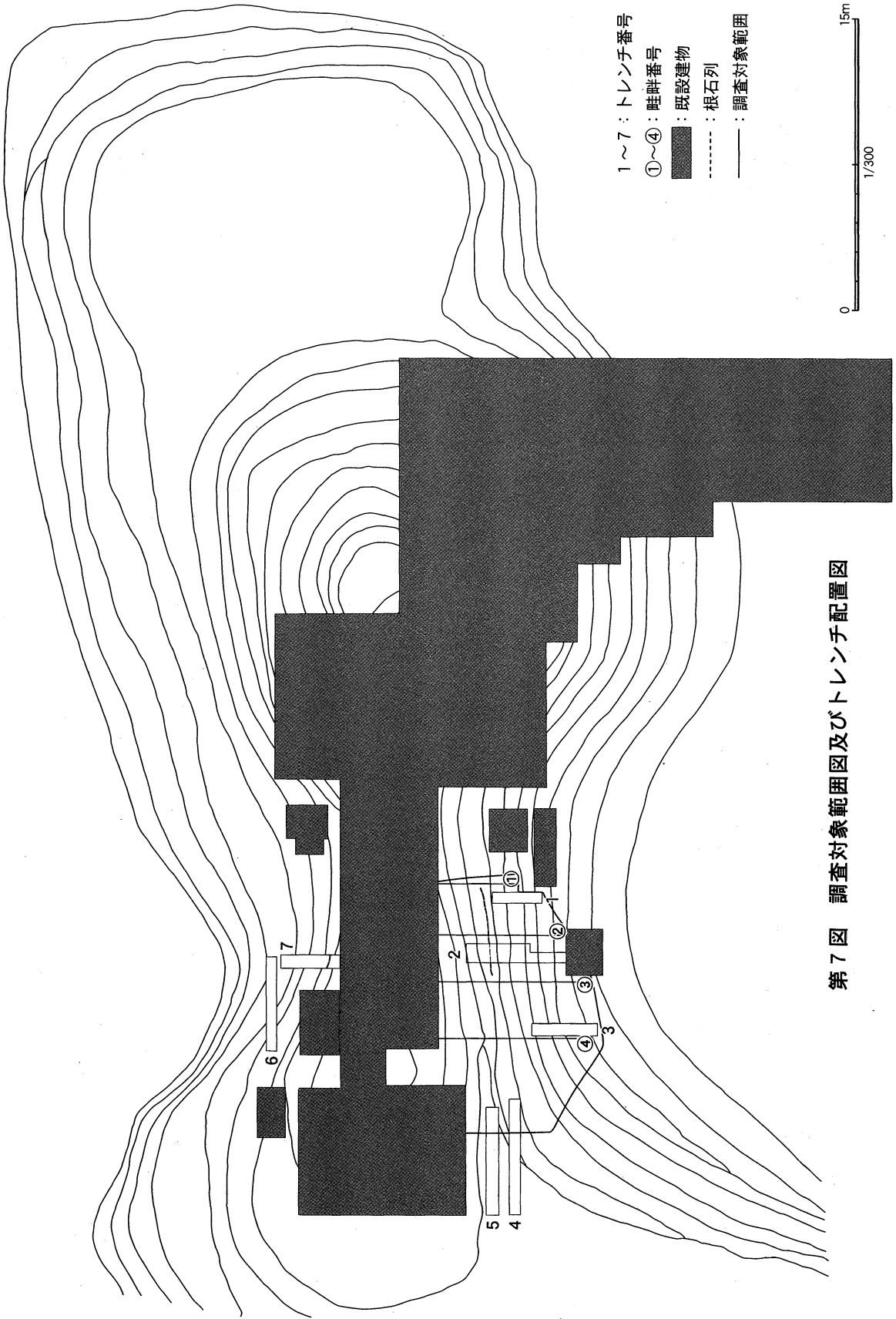
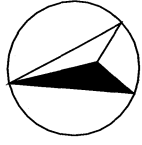


第5図 第1・2畦畔土層断面図

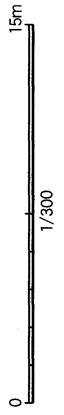


第6図 第3・4畦畔土層断面図





第7図 調査対象範囲図及びトレンチ配置図



また、葺石は南側の大きな谷に向かって大半が崩落していたため、現位置をとどめていないものについては、取上げに細心の注意を払いながら調査を進めた。

前方部西側の墳丘端部については、建設工事等によって削平されたのか、墳端が判明しなかった。しかし、北側の前方部途中の墳丘端部については、根石と考えられる部分が検出されたため、その範囲がある程度判明した。

また、版築状況、他の埋葬施設については、断面削出し、遺構検出作業を実施したが、検出するに至らなかった。

埴輪は数種類検出されたが、いずれも完形に近い状態の破片は少なく、比較的大きい破片は、根石付近に集中する出土状況であった。

限られた範囲の調査状況での言及はやや危険であるが、根石付近に埴輪列（痕跡）等が認められなかったことから、墳頂から崩落した可能性は推測された。

また、壺形埴輪は1点の二重口縁を除いて、いずれも単口縁であった。さらに、壺形埴輪とのセット関係が思慮される器台形埴輪、円筒形埴輪、縄文時代の遺物も検出した。

しかし、古墳の築造時期を決定付けるであろう、須恵器、土師器、在来系土器は出土しなかった。

第3節 検出遺構

古墳の外表施設である葺石を調査区全域で検出したが、築造時の葺石は部分的に検出されたのみであり、その大部分は崩落等により築造時の原位置をとどめていなかった。

しかし、部分的ではあるが、前方後円墳の前方部端部南側の根石列（最大延長 9.1m、最大幅 1.6m）を検出した。

根石列は根石（最大直径 約60cm）と考えられる大きな石を1列に並べた後、その上に（最大直径 約30cm）人頭大の石を現状で一段積み上げているようであった。

さらに、不規則に石を配置し、その石と石との空白部分に（最大直径 約20cm）の石を斜面（地山）に突き刺すように積み上げていた。また葺石に利用している石は、そのほとんどが砂岩であり、角礫は少なく円礫がその主体を占めていた。さらに場所によっては、板石状の石も貼付けられるように、葺石として利用されていた。

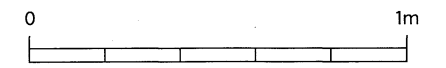
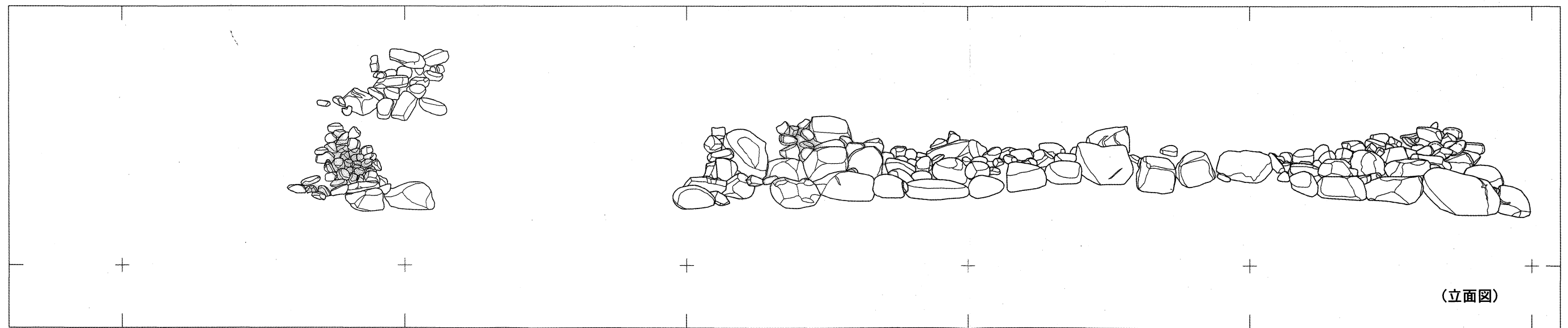
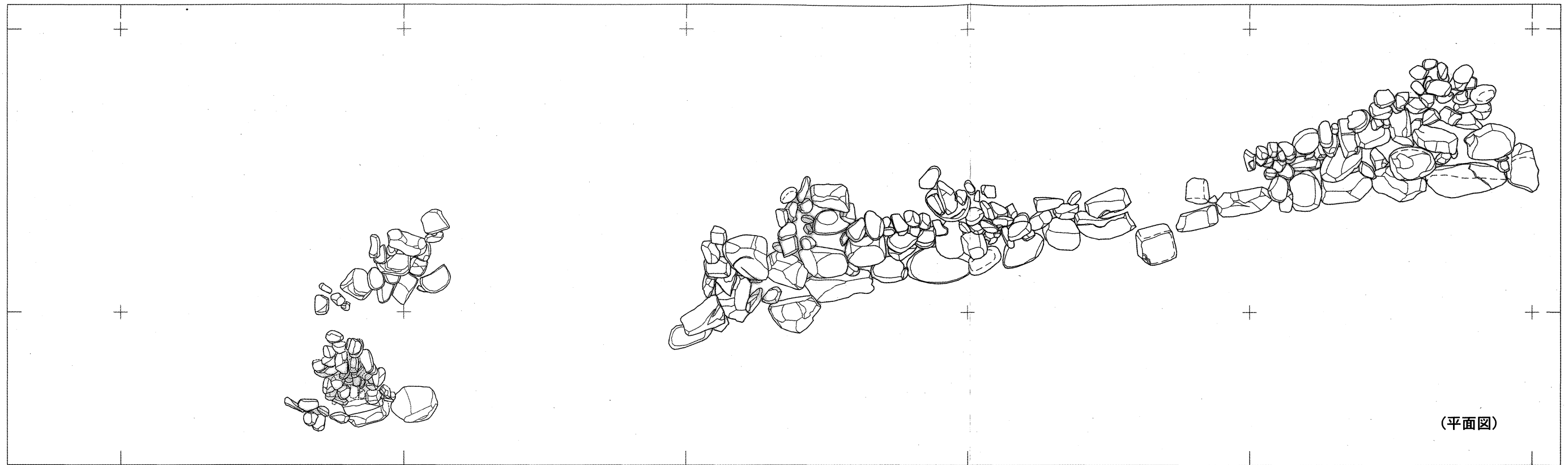
第4節 出土遺物

発掘調査対象となった前方後円墳の前方部からは、須恵器、土師器、在来系土器等の時期決定の指標となりえる遺物の出土は認められず、数種類の埴輪のみが検出された。埴輪は、壺形埴輪、器台形埴輪、円筒形埴輪である。いずれの器種の外面にも、赤色顔料が塗布されている。また、縄文時代の遺物も少量出土した。

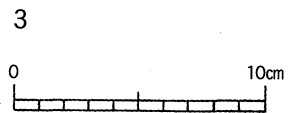
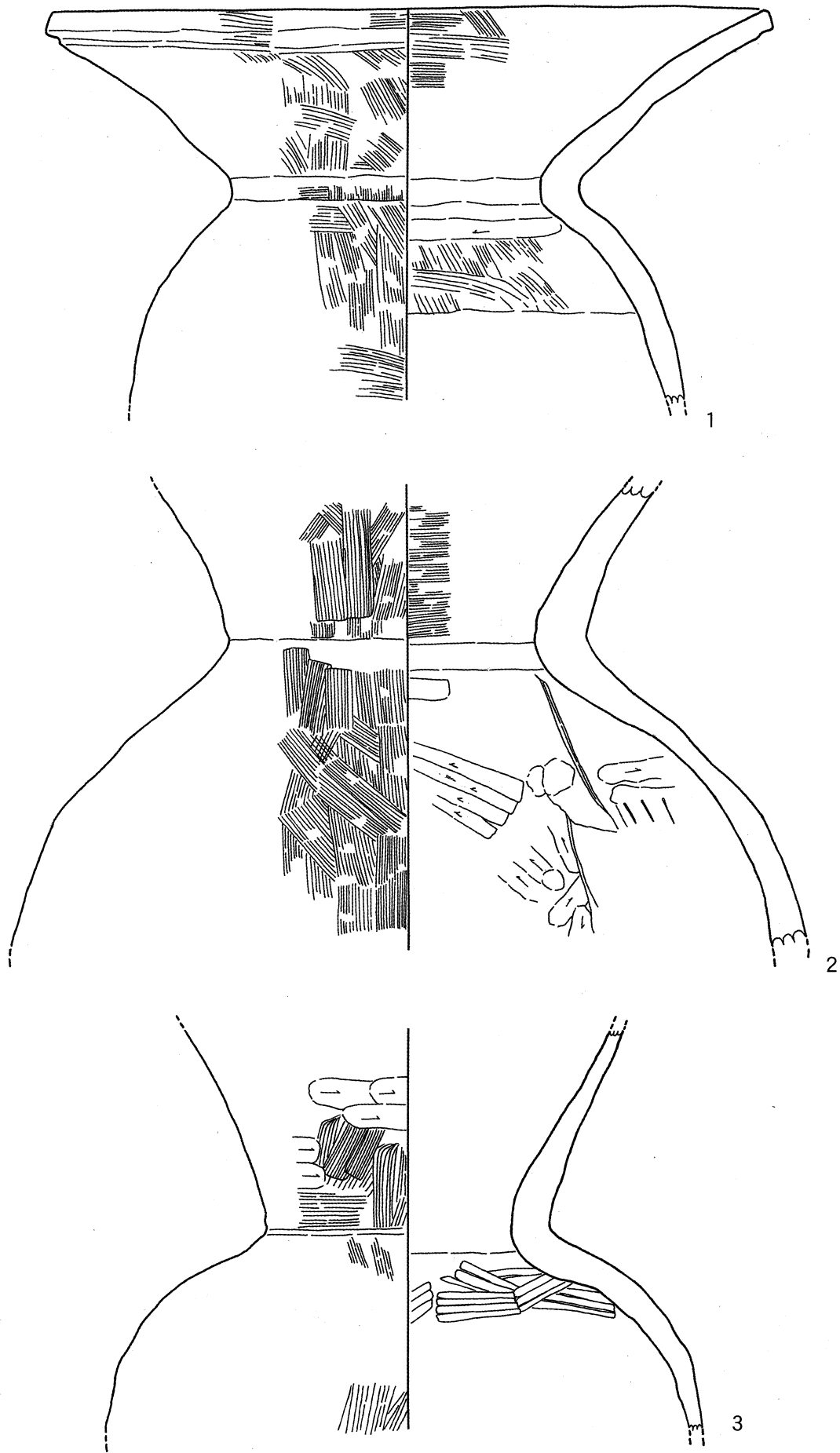
1 壺形埴輪（第9図1～第12図16）

壺形埴輪は、口縁部の形態から単口縁形（第9図1～第12図15）と二重口縁形（第12図16）の両方が存在する。

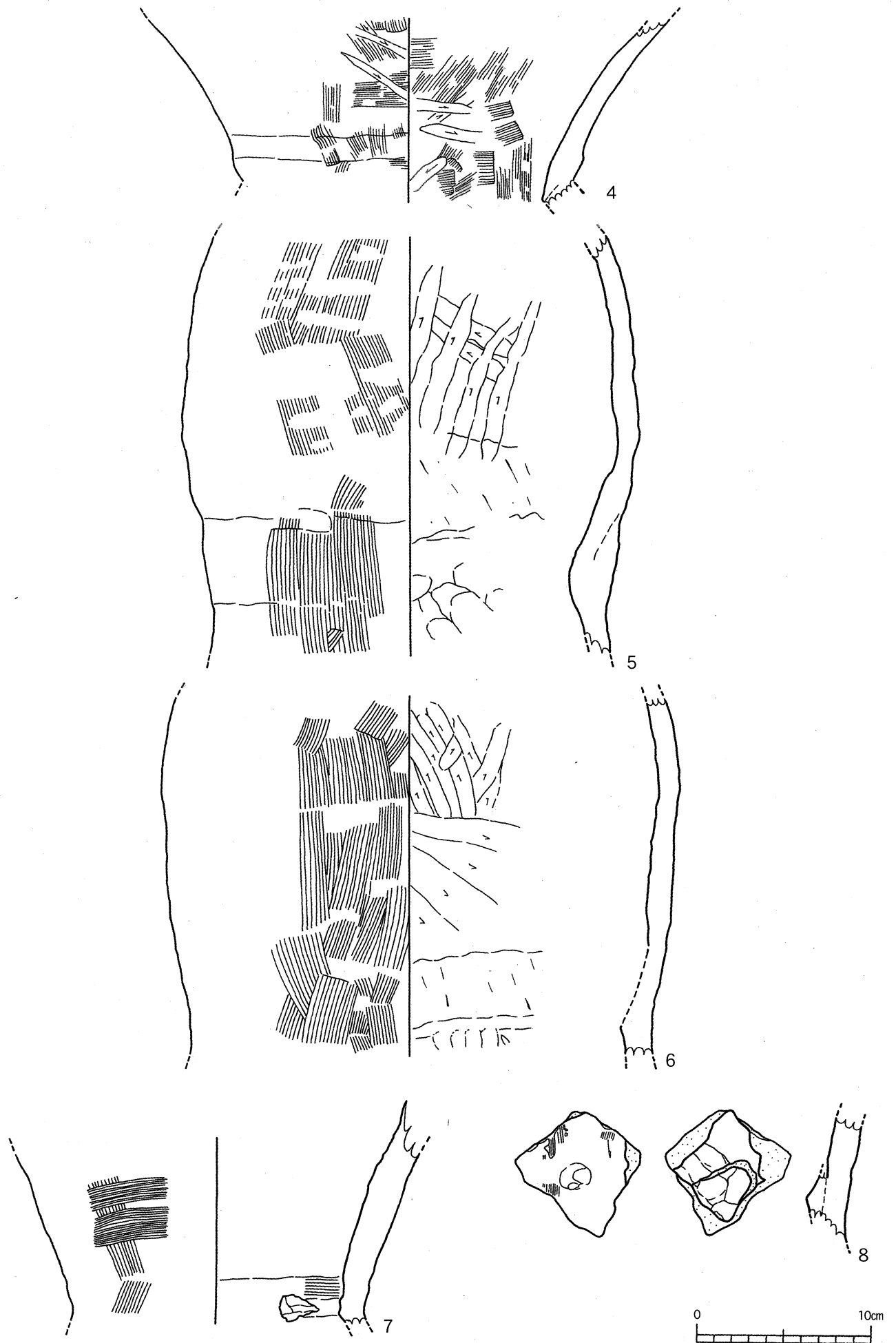
しかし、二重口縁形と考えられる壺形埴輪の出土は1点のみであり、単口縁形の壺形埴輪がその主体を占めることは明らかである。



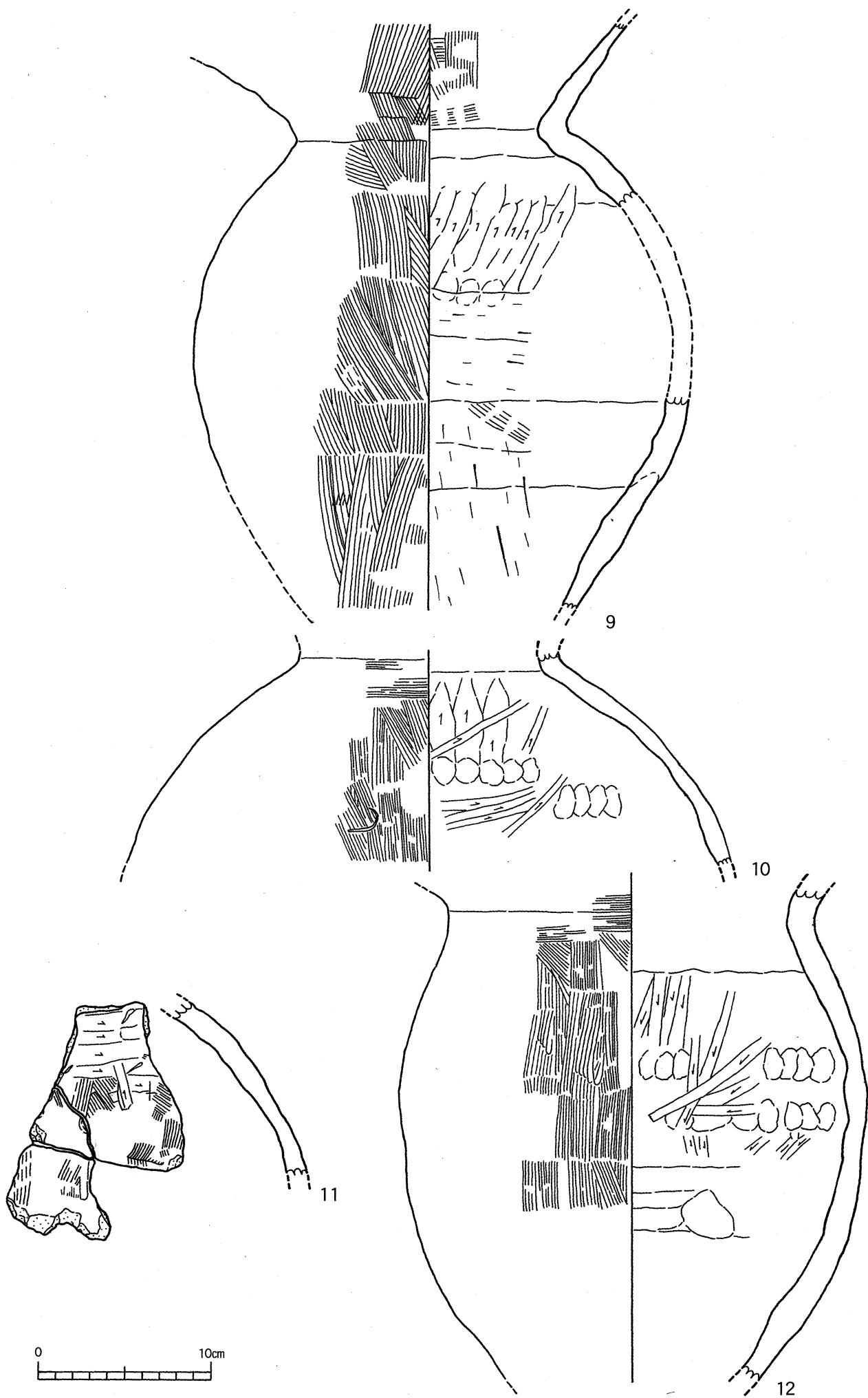
第8图 根石列实测图 (平面图/立面图)



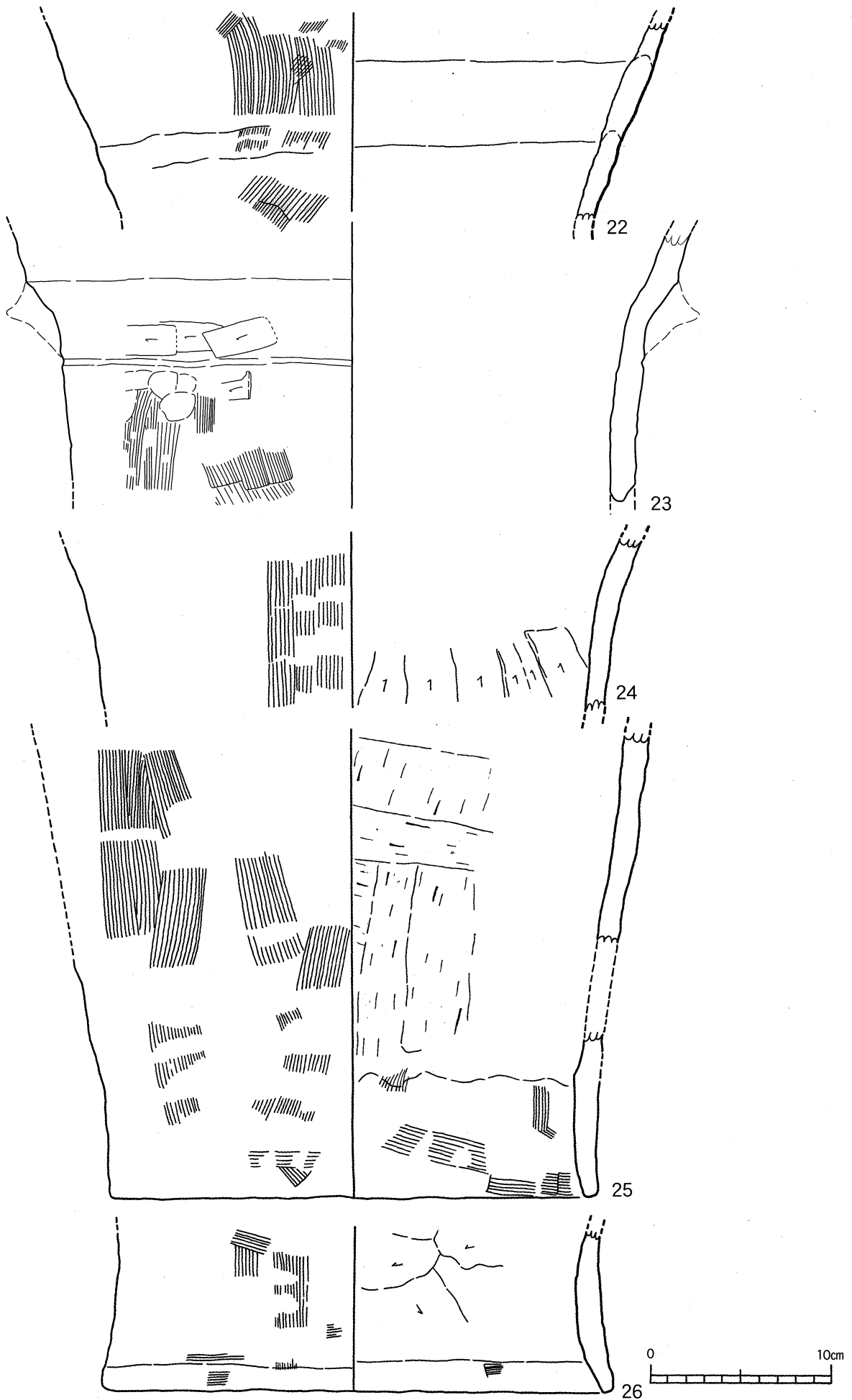
第9图 出土埴輪実測图(1)



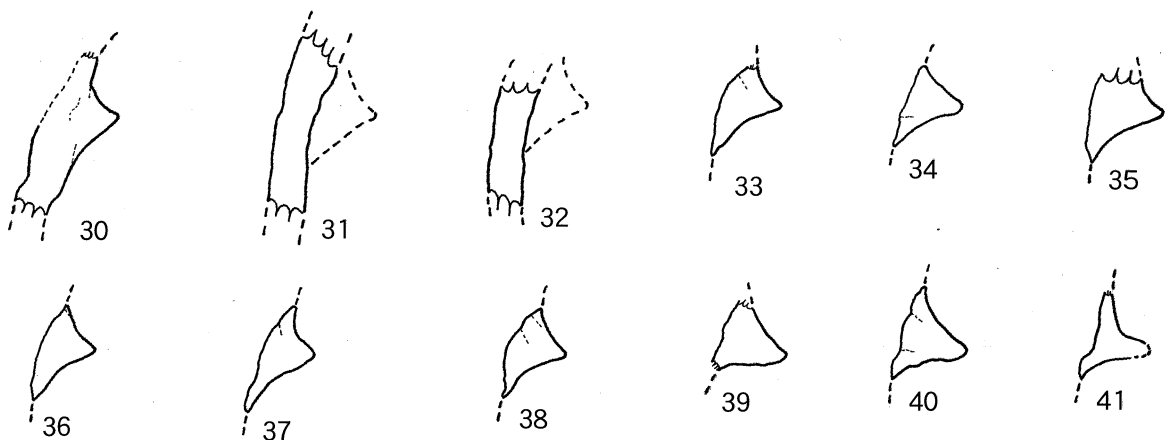
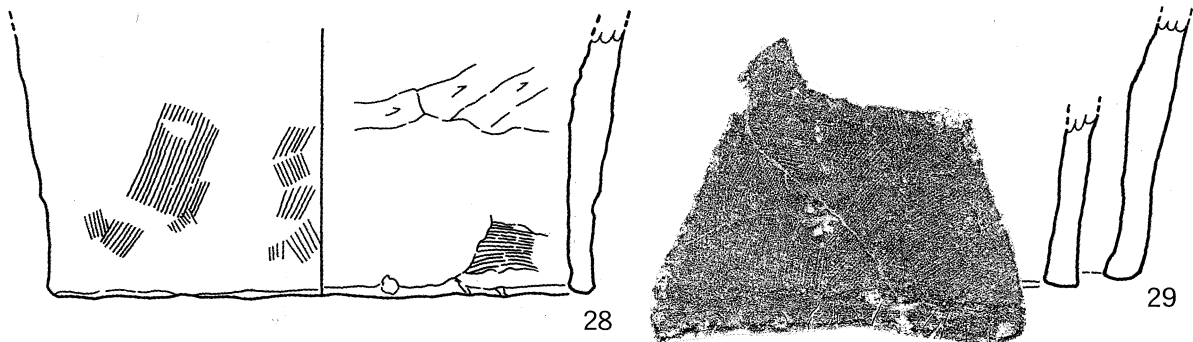
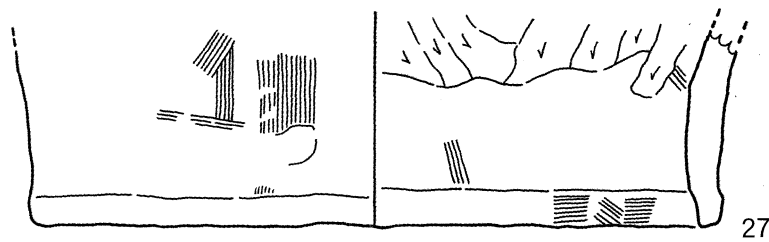
第10图 出土埴輪実測图(2)



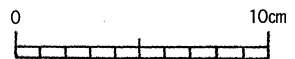
第11圖 出土埴輪実測図(3)



第14图 出土埴輪実測図(6)



第15図 出土埴輪実測図(7)



2 器台形埴輪 (第13図17~21)

器台形埴輪は、外方気味の胴部から、直口気味に立ち上がり、口縁端部が短く外反するものである。胴部に透かし等はみられない。

胴部の外面調整は、タテ・ナナメハケのち荒いミガキを施すものがその主体を占めるが、口縁部では、ヨコハケのちミガキを施す。

内面調整は、ナナメの指・ヘラケズリ状の調整がその主体を占め、のちナデを施すものも存在する。

3 円筒形埴輪 (第14図22~第16図48)

胴部から短く内湾しながら立ち上がり、口縁部が緩やかに外反するもの〈A類〉と外方気味の胴部から、内傾しながら立ち上がり、屈曲気味に外反するもの〈B類〉の両方が存在する。

① A類 (第14図22～第15図41)

それぞれの破片は、いずれも接合していないが、胎土等から同一種類として取扱った。全体的には、比較的大型の個体であることは想定できる。接合していないが、胴部上位には、断面三角形の突帯が貼付される可能性は高い。しかし、下位に突帯の貼付、透かしはみられない。また、その意図は定かではないが、突帯の接合部にミガキ調整がみられる点に、その特色をもつ。

胴部から口縁部の外面調整は、タテ・ナナメハケがその主体を占めるが、のちにヨコナデ、荒いミガキを施す部分もみられる。

内面調整は、ナデがその主体を占めると考えられるが、摩耗が著しく判然としない。

胴部から底部の外面調整は、タテ・ナナメハケがその主体を占めるが、荒いミガキ調整を施す部分もみられる。

内面調整は、タテ・ナナメのヘラケズリ状の調整がその主体を占める。底部ではナナメハケがその主体を占めるが、のちにヨコナデも施される。

② B類 (第16図42～48)

復元口径に、若干のバラツキはみられるが、小型の個体はその主体を占める。屈曲気味に外反するもの(42～46)と短く外反するもの(47、48)の両方が存在する。いずれも屈曲部内面に明確な稜をもつ。

口縁部の外面調整は、ヨコハケがその主体を占めるが、のちにミガキを施すものもみられる。

内面調整は、ヨコハケが主体を占めるが、のちにミガキを施す部分もみられる。

胴部の外面調整は、タテ・ナナメハケがその主体を占めるが、のちに荒いミガキを施す部分もみられる。

内面調整は、ナナメ・ヨコハケ及び指・ヘラケズリ状の調整がその主体を占めるが、のちに荒いミガキを施す部分もみられる。

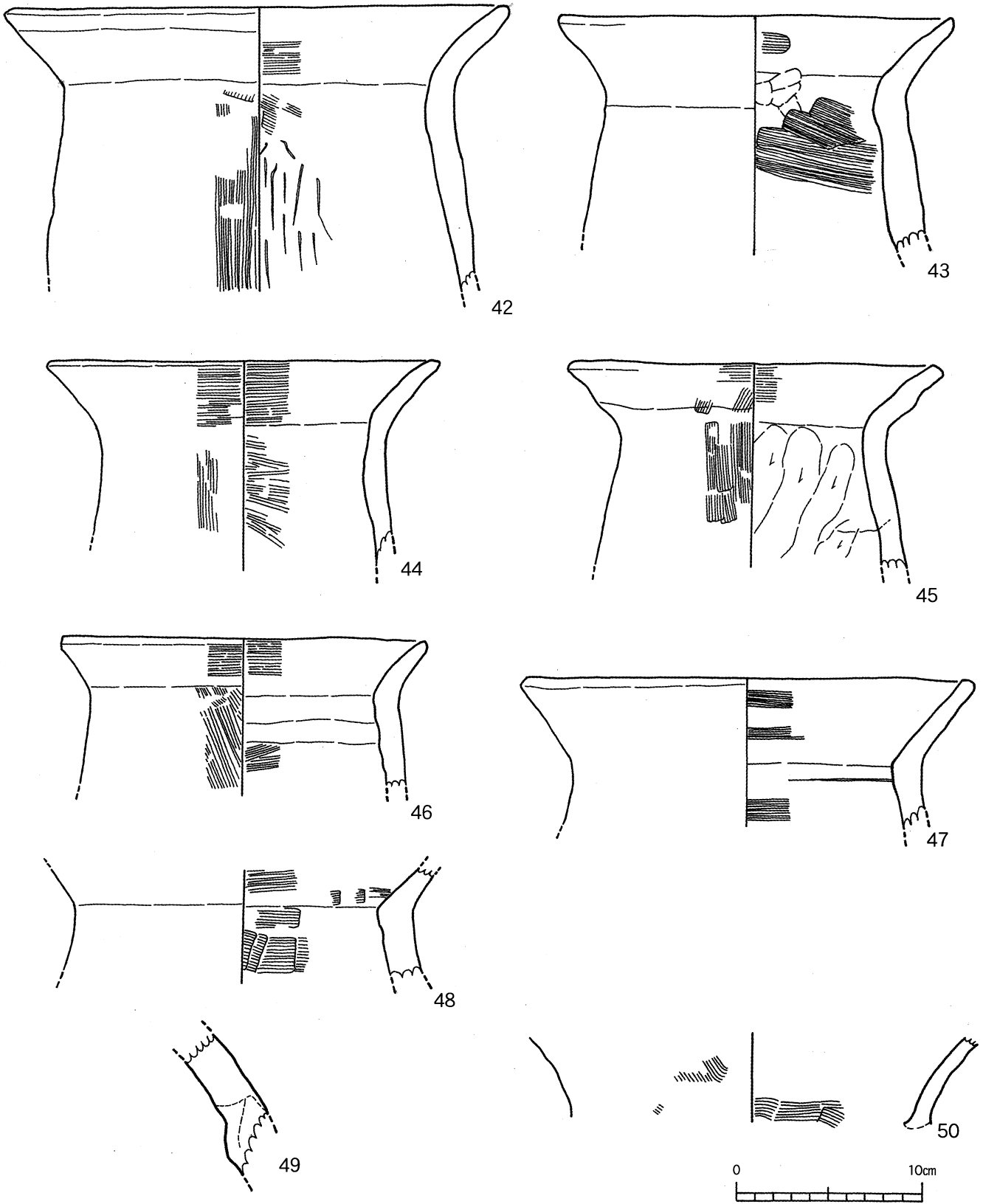
4 その他の埴輪 (第16図49、50)

49は、かなり厚手の器壁をもつもので、胎土が他種と異なる点に特色をもつ。傾き不安であるが、肩部付近の破片の可能性が残る。50も傾き不安な埴輪片で、内外面にナナメ・ヨコハケを施す。口縁部付近の破片か。

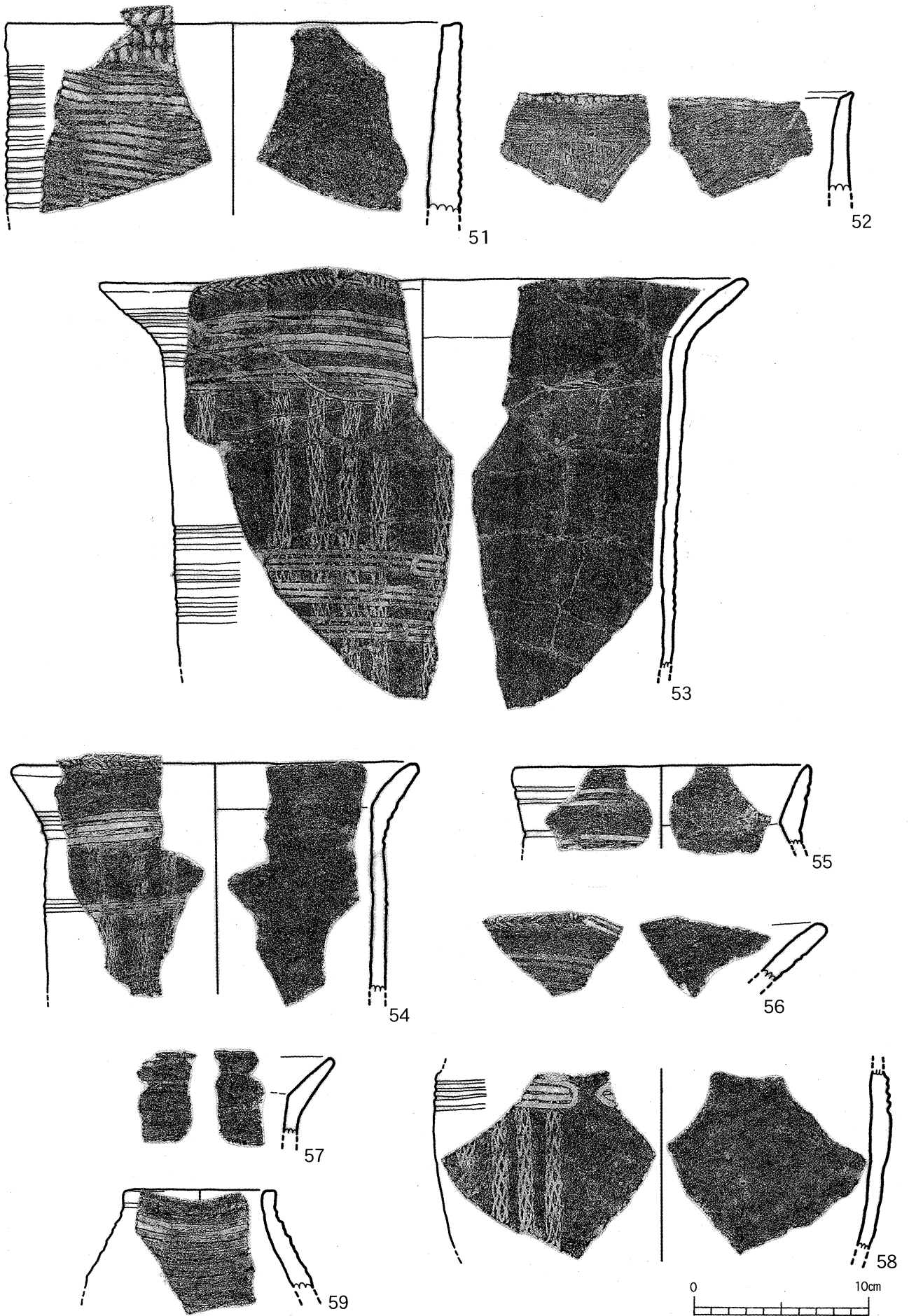
5 縄文時代の遺物 (第17図51～第18図62)

本古墳で表採された遺物である。51、52は、円筒形土器の口縁部破片である。53～57は胴部から外傾気味に立ち上がり、口縁部が屈曲する深鉢である。51、56は、緩やかな山形口縁となる。58は、胴部が若干丸みを帯びている。59は、外面に浅い沈線が施文される壺形土器である。

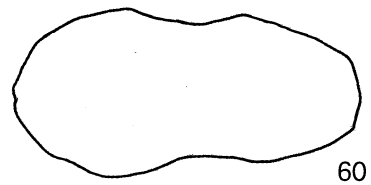
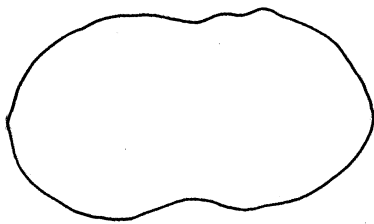
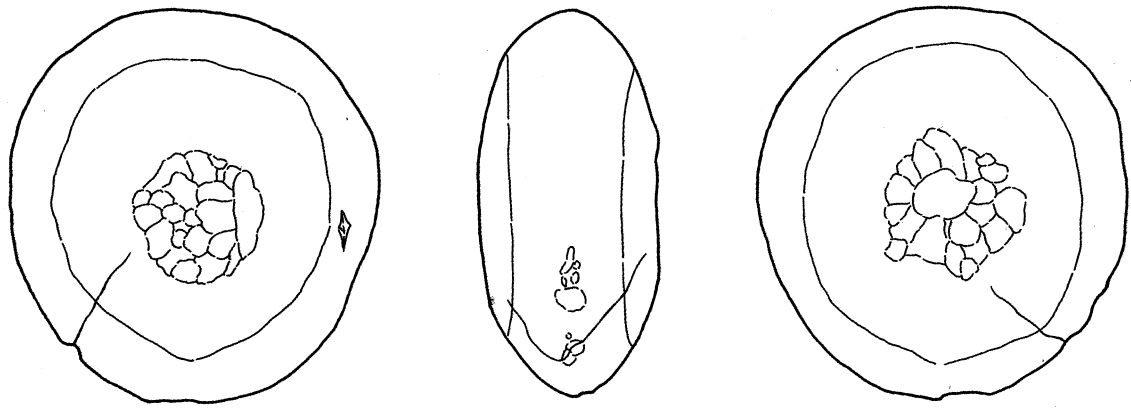
60、61は、上下面の中央に敲打痕がみられる敲石で、石材は砂岩である。62は頁岩製の石製品と考えられるが、祭祀的な用途も想定できる。



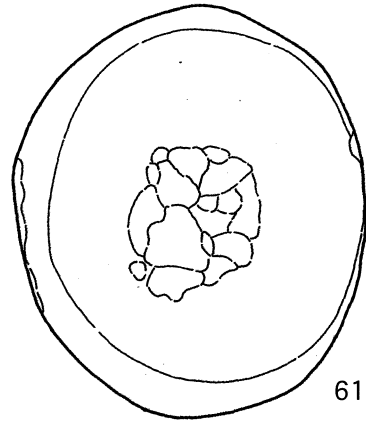
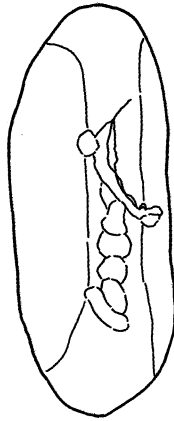
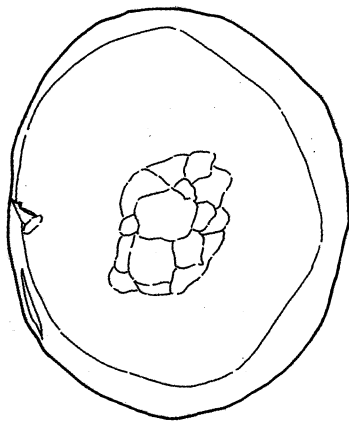
第16图 出土埴輪実測图(8)



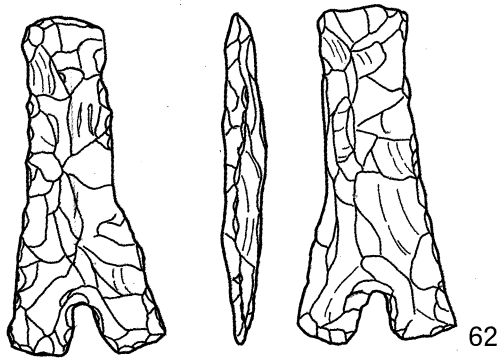
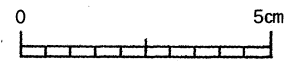
第17図 出土遺物実測図(1)



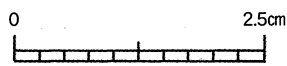
60



61



62



第18图 出土遺物実測図(2)

挿図 番号	遺物 番号	種別	部位	法量(cm) / ()内復元径				外面調整	内面調整	備考
				口径	頸部径	胴部最大径	底径			
第9図	1	壺形	口縁~胴部	(36.2)	(17.6)	(28.2)	—	口縁部:タテ・ナナメハケのちミガキ 胴部:タテ・ナナメハケのちミガキ	口縁部:ナナメ・ヨコハケのちミガキ 胴部:ナナメハケのち荒いミガキ	・口縁部外面に沈線巡るが次第に消滅 ・口縁・胴部外面に黒斑 ・胴部内面に粘土単位の継目 ・赤色顔料塗布痕跡?
	2	壺形	口縁~胴部	—	(18.2)	(40.2)	—	口縁部:タテ・ナナメハケのち荒いミガキ 胴部:タテ・ナナメハケのち荒いミガキ	口縁部:ヨコハケのち荒いミガキ? 胴部:ナナメ荒いヘラケズリ状	・胴部に歪み ・胴部内面の屈曲部下位の調整荒い ・内外面に赤色顔料塗布 ・胴部外面に黒斑 ・胴部内面に粘土単位の継目、指オサエ
	3	壺形	口縁~胴部	—	(14.4)	(30.2)	—	口縁部:タテ・ナナメハケのち荒い指ヨコナデ(上位部分) 胴部:タテ・ナナメハケのちヨコナデ	口縁部:ナナメ・ヨコハケのちヨコナデ 胴部:荒いヘラケズリ状	・胴部外面に黒斑 ・内面の屈曲部下位は調整荒い ・赤色顔料塗布痕跡?
第10図	4	壺形	口縁部	—	(18.8)	—	—	タテ・ナナメハケのち荒いミガキ?	タテ・ナナメハケのち荒いミガキ?	・内外面に赤色顔料塗布
	5	壺形	胴~底部	—	—	(26.2)	—	胴部:タテ・ナナメハケのち荒いミガキ	胴部上部:ナナメ指ケズリ状 胴部下部:ナナメヘラケズリ状	・胴・底部内外面に粘土単位の継目 ・厚手の粘土単位を貼付して底部を形成、指オサエ ・胴部外面に黒斑 ・胴部外面に赤色顔料塗布痕跡?
	6	壺形	胴~底部	—	—	(29.6)	—	胴部:タテ・ナナメハケのち荒いミガキ?	胴部上部:ナナメ指ケズリ状 胴部下部:ナナメヘラケズリ状	・胴部内面に粘土単位の継目 ・粘土単位を貼付して底部を形成、指オサエ
	7	壺形	胴~底部	—	—	—	—	胴部:タテ・ナナメハケのちミガキ	胴部:タテ・ナナメハケのち荒いミガキ	・胴部外面に黒斑 ・胴部内面に粘土単位の継目 ・厚手の粘土単位を貼付して底部を形成
	8	壺形	胴~底部	—	—	—	—	胴部:タテ・ナナメハケのち荒いミガキ?	胴部下部:ヨコナデ、指オサエのち荒いミガキ?	・胴部外面に黒斑 ・胴部内外面に粘土単位の継目 ・厚手の粘土単位を貼付して底部を形成、指オサエ
第11図	9	壺形	口縁~底部	—	(15.6)	(28.6)	—	口縁部:タテ・ナナメハケのちミガキ 胴部:タテ・ナナメハケのちミガキ	口縁部:ヨコハケのち荒いミガキ 胴部上部:ナナメ指ケズリ状 胴部中部:ヨコヘラケズリ状 胴部下部:タテヘラケズリ状	・口縁部に歪み ・胴部内面に粘土単位の継目、指オサエ ・胴部外面に黒斑 ・粘土単位を貼付して底部を形成 ・赤色顔料塗布痕跡?
	10	壺形	頸部~胴部	—	(14.8)	(34.4)	—	頸部:タテハケのちミガキ 胴部上部:タテ・ナナメハケのち荒いミガキ	頸部:ヨコナデ 胴部上部:タテ指ケズリ状	・胴部外面に鈎針状の押圧痕 ・胴部内面に粘土単位の継目、指オサエ ・内外面に赤色顔料塗布
	11	壺形	胴部	—	—	—	—	頸部:タテ・ナナメハケのち荒いミガキ? 胴部上部:タテ・ナナメハケのち荒いミガキ?	胴部上部:ナナメ荒いヘラケズリ状	・内外面に赤色顔料塗布 ・幅1.8cm程度のヘラ状工具か
	12	壺形	頸部~底部	—	(20.8)	(26.6)	—	頸部:タテハケのちミガキ 胴部上部:タテ・ナナメハケのち荒いミガキ?	頸部:ヨコナデ 胴部上部:タテ・ナナメヘラナデ 胴部下部:ヨコ荒いヘラケズリ状 底部:ヨコナデ	・胴部内面の屈曲部下位の調整荒い ・胴部内面に粘土単位の継目、指オサエ ・粘土単位を貼付して底部を形成 ・胴部外面に黒斑 ・内外面に赤色顔料塗布
第12図	13	壺形	胴~底部	—	—	(24.2)	—	胴部:タテ・ナナメハケのちミガキ	胴部上部:タテ指ケズリ状 胴部下部:ナナメ荒いヘラケズリ状 底部:タテハケのち荒いミガキ	・胴部外面に黒斑 ・粘土単位を貼付して底部を形成 ・胴部内面に粘土単位の継目、指オサエ ・内外面に赤色顔料塗布?
	14	壺形	胴~底部?	—	—	—	—	胴部:ナナメハケ	胴部:ナナメ荒いヘラケズリ状	・外面に黒斑 ・外面に深めの押圧痕 ・内外面に赤色顔料塗布
	15	壺形	胴~底部	—	—	—	—	胴部:ナナメハケ	胴部:ナナメ荒いヘラケズリ状 底部:ヨコハケのちヨコナデ	・胴部に粘土単位を貼付して底部を形成 ・底部内外面に赤色顔料塗布痕跡?
	16	壺形	口縁部	—	—	—	—	ヨコハケのちミガキ	ヨコハケのちミガキ	・二重口縁形 ・二次口縁受部外面に沈線 ・内外面に赤色顔料塗布痕跡?
第13図	17	器台形	口縁~胴部	(21.6)	—	—	—	口縁部:ヨコハケのちミガキ 胴部:タテ・ナナメハケのち荒いミガキ?	口縁部:ヨコメハケのちミガキ 胴部上部:ナナメヘラナデ 胴部下部:ヘラケズリ状	・胴部外面に黒斑 ・胴部内面に粘土単位の継目 ・胴部外面に瘤状粘土 ・内外面に赤色顔料塗布痕跡?
	18	器台形	胴部	—	—	—	—	胴部:タテ・ナナメハケのちヨコナデ	胴部:ナナメヘラナデのちナデ	・赤色顔料塗布痕跡? ・胴部内面に粘土単位の継目、指オサエ
	19	器台形	胴部	—	—	—	—	胴部:ナナメハケのち荒いミガキ?	胴部:ヨコハケのちタテ指ケズリ状	・胴部外面に黒斑 ・内面に赤色顔料塗布痕跡?
	20	器台形	胴部	—	—	—	—	胴部:ナナメハケのちヨコナデ	胴部:ナナメヘラナデ、指オサエ	
	21	器台形	胴部	—	—	—	—	胴部:タテ・ナナメハケのちヨコナデ	胴部下部:ナナメハケのちヘラケズリ状	・外面に赤色顔料塗布
第14図	22	円筒形	口縁部	—	—	—	—	ナナメハケのち荒いミガキ?	摩耗のため不明	・外面に赤色顔料塗布痕跡? ・胴部内外面に粘土単位の継目
	23	円筒形	口縁~胴部	—	—	—	—	タテ・ナナメハケのち荒いミガキ、剥離部分ミガキ?	摩耗のため不明	・胴部外面に突帯剥離痕 ・内外面に赤色顔料塗布痕跡?
	24	円筒形	胴部	—	—	—	—	タテハケのち荒いミガキ?	ヨコナデ(上位)、荒いヘラケズリ状	・外面に赤色顔料塗布痕跡?
	25	円筒形	胴~底部	—	—	—	(26.8)	胴部:タテ・ナナメハケのちミガキ? 底部:タテ・ナナメハケのち荒いミガキ?	胴部:タテ・ナナメヘラケズリ状のちヨコナデ 底部:ヨコハケのち荒いミガキ?	・外面に赤色顔料塗布痕跡? ・胴部外面に黒斑 ・粘土単位を貼付して底部を形成
	26	円筒形	胴~底部	—	—	—	(28.2)	胴部:タテハケのちヨコナデ	胴部:ヘラケズリ状 底部:ヨコハケのちヨコナデ	・粘土単位を貼付して底部を形成

挿図 番号	遺物 番号	種別	部位	法量(cm) / ()内復元径				外面調整	内面調整	備考
				口径	頸部径	胴部最大径	底径			
第15 図	27	円筒形	胴~底部	—	—	—	(27.4)	胴部:タテハケのちヨコナデ 底部:ヨコハケのちヨコナデ	胴部:ヘラケズリ状 底部:ナナム・ヨコハケのち ヨコナデ	・粘土単位を貼付して底部を形成 ・外面に赤色顔料塗布痕跡?
	28	円筒形	胴~底部	—	—	—	(21.8)	胴部:ナナムハケのち荒いヨコナデ 底部:ナナムハケのちヨコナデ	胴部:ヘラケズリ状 底部:ヨコハケのちヨコナデ	・外面に赤色顔料塗布
	29	円筒形	胴~底部	—	—	—	—	胴・底部:ナナムハケのちミガキ?	胴部:ヘラケズリ状 底部:ヨコハケのち荒いミガキ	・外面に赤色顔料塗布痕跡?
	30	円筒形	胴部+突帯	—	—	—	—	胴部:ナナムハケのち荒いミガキ? 突帯:ヨコナデのち荒いミガキ?	胴部:ヨコナデのちミガキ	・胴部内面に粘土単位の継目、指オサエ
	31	円筒形	胴部	—	—	—	—	タテ・ナナムハケのち荒いナデ	荒いナナムハケのちヨコナデ	・外面に突帯剥離痕 ・内面に指オサエ ・外面に赤色顔料塗布痕跡?
	32	円筒形	胴部	—	—	—	—	タテ・ナナムハケのち荒いナデ	ヨコナデ	・外面に突帯剥離痕 ・内面摩耗
	33	円筒形	突帯	—	—	—	—	ヨコナデ	ヨコナデのち荒いミガキ?	・外面に赤色顔料塗布痕跡?
	34	円筒形	突帯	—	—	—	—	ヨコナデのち荒いミガキ?	ヨコナデのちミガキ	・粘土単位の継目 ・上面摩耗
	35	円筒形	突帯	—	—	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	・粘土単位の継目 ・外面に赤色顔料塗布痕跡?
	36	円筒形	突帯	—	—	—	—	ヨコナデ	ヨコナデのちミガキ	・粘土単位の継目 ・上面摩耗
	37	円筒形	突帯	—	—	—	—	ヨコナデのちミガキ?	ヨコナデのちミガキ?	・粘土単位の継目
	38	円筒形	突帯	—	—	—	—	ヨコナデ	ヨコナデのちミガキ	・粘土単位の継目 ・上面摩耗 ・外面に赤色顔料塗布痕跡?
	39	円筒形	突帯	—	—	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	・上面摩耗 ・外面に赤色顔料塗布痕跡?
40	円筒形	突帯	—	—	—	—	ヨコナデのちミガキ?	ヨコナデのちミガキ?	・粘土単位の継目 ・外面に赤色顔料塗布痕跡?	
41	円筒形	突帯	—	—	—	—	ヨコナデのちミガキ?	ヨコナデのちミガキ?	・外面に赤色顔料塗布痕跡?	
第16 図	42	円筒形	口縁~胴部	(26.6)	—	—	—	口縁部:ヨコハケのち荒いミガキ 胴部:タテ・ナナムハケのち 荒いミガキ	口縁部:ヨコハケのち荒いミガキ? 頸部:ナナムハケのち荒いミガキ? 胴部:ヘラケズリ状	・口縁部外面に黒斑 ・内外面に赤色顔料塗布痕跡?
	43	円筒形	口縁~胴部	(21.0)	—	—	—	口縁部:ヨコハケのちミガキ 胴部:タテ・ナナムハケのち 荒いミガキ	口縁部:ヨコハケのちミガキ 頸部:指オサエ 胴部:ケズリ状のナナムハケのち 荒いミガキ	・胴部内面の屈曲部下位の調整荒い ・内外面に赤色顔料塗布
	44	円筒形	口縁~胴部	(21.2)	—	—	—	口縁部:ヨコハケのち荒いミガキ? 胴部:タテ・ナナムハケのち 荒いミガキ?	口縁部:ヨコハケのち荒いミガキ? 胴部:ナナムハケのち荒いミガキ?	・内外面に赤色顔料塗布痕跡? ・口縁・胴部外面に黒斑 ・内面の大部分は剥離
	45	円筒形	口縁~胴部	(19.4)	—	—	—	口縁部:ヨコハケのちミガキ? 胴部:タテハケのち荒いヨコナデ	口縁部:ヨコハケのち荒いミガキ? 胴部:タテ・ナナムハケのち ナナム指ナデ状	・胴部内面に粘土単位の継目
	46	円筒形	口縁~胴部	(19.6)	—	—	—	口縁部:ヨコハケのちミガキ 胴部:ナナムハケのち荒いミガキ	口縁部:ヨコハケのちミガキ 胴部:ヨコハケのちミガキ	・胴部内面に粘土単位の継目 ・内外面に赤色顔料塗布
	47	円筒形	口縁~胴部	(23.6)	—	—	—	口縁部:ヨコハケのち荒いミガキ 胴部:タテハケのち荒いミガキ?	口縁部:ヨコハケのちミガキ 胴部:ヨコハケのち荒いミガキ	・内外面に赤色顔料塗布
	48	円筒形	口縁~胴部	—	—	—	—	口縁部:ヨコハケのち荒いミガキ 胴部:タテハケのち荒いミガキ?	口縁部:ヨコハケのちミガキ 胴部:ヨコハケのち荒いミガキ	・内外面に赤色顔料塗布痕跡?
	49	不明	肩部?	—	—	—	—	タテ・ナナムハケのち荒いミガキ?	タテ・ナナムハケのち荒いミガキ?	・内外面に赤色顔料塗布? ・胴部内面に粘土単位の継目 ・傾き不安
	50	不明	口縁部?	—	—	—	—	ナナムハケのち荒いミガキ?	ヨコハケのち荒いミガキ?	・胎土堅緻 ・内外面に赤色顔料塗布 ・傾き不安
	第17 図	51	深鉢	口縁~胴部	(25.9)	—	—	—	貝殻復縁による深い条痕	ナナムヘラケズリ状
52		深鉢	口縁~胴部	—	—	—	—	貝殻復縁による浅い条痕	ナナムヘラケズリ状のちヨコナデ	・外面スス附着 ・口唇部外面刻目
53		深鉢	口縁~胴部	(36.8)	—	—	—	ヨコナデのち荒いミガキ?	ヨコナデのち荒いミガキ?	・口縁部内外面に黒斑 ・口唇部に羽状刻目
54		深鉢	口縁~胴部	(22.8)	—	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	・内外面摩耗 ・口唇部に羽状刻目
55		深鉢	口縁部	(16.7)	—	—	—	ヨコナデのち荒いミガキ?	ヨコナデ	・内外面摩耗
56		深鉢	口縁部	—	—	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	・内外面摩耗 ・口唇部に羽状刻目
57		深鉢	口縁~胴部	—	—	—	—	ヨコナデのちミガキ?	ヨコナデのちミガキ	・外面摩耗 ・外面スス附着
58		深鉢	胴部	—	—	—	—	ヨコナデのち荒いミガキ?	ヨコナデ	
59		壺形	口縁~胴部	(8.7)	—	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	・微隆刻目突帯

第Ⅳ章 まとめにかえて

1 墳丘について

本古墳は、昭和38年の国民宿舎建設工事によって、そのほとんどが消滅したと考えられ、明確な墳丘が認められず、原形をとどめていない。今回の発掘調査は、前方後円墳の前方部南側と考えられる地点であった。

本古墳の主軸は、前方部をほぼ西に、後円部をほぼ東に向けた、東西方向であったとされることから、今回の発掘調査では、主軸方向である西側の墳丘端部を明確にすることを主目的として、合計7か所のトレンチも設定した。調査の結果、工事等によって消滅したのか、前方部西側の墳端を明確にすることはできなかった。(1)

2 盛土について

本古墳は地山整形後、上面は盛土（版築）して、築造された古墳ではないかと、従来から指摘されていた。今回の前方部南側の調査では、カギ層となる茶褐色土（縄文時代早期相当層）と黄白色火山灰土(2)の地山整形(3)は確認された。しかし、盛土については、工事等による削平を受けたものか、確認されなかった。ただ、築造時に盛土がなされたであろうことは否定できない。(4)

3 葺石について

今回の調査において、葺石の根石からの積み上げ、地山に突き刺す積み上げ、地山に貼付する積み上げ等、それぞれの葺き方が部分的に確認された。また、根石列の外側にテラス面(5)も検出された。

4 埴輪の器種組成について

今回調査対象となった前方後円墳の前方部南側からは、時期決定の指標となりえる、須恵器、土師器、在地系土器は出土しておらず、数種類の埴輪が唯一の出土遺物であった。

埴輪は、壺形埴輪(6)、器台形埴輪(7)、円筒形埴輪(8)であり、形象埴輪等は検出されていない。

埴輪の器種組成の多様性等から、前方後円墳の前方部に追葬の可能性が指摘された(9)が、今回の調査によって、そのことを明確にすることはできなかった。

① 壺形埴輪

壺形埴輪には、器高があり、器壁が厚く、重量感のあるものと、器高があまりなく、比較的器壁が薄く、重量感のないものの両方が存在するようである。器台形埴輪(10)が出土していることから、壺形埴輪とのセット関係は想定できるが、重量・底径・底部形成(11)等を考慮すると、前者の可能性は低いと考えられるが、後者の可能性はあるのではないかと考えている。

推測の域を脱し得ないが、前者の重量感のある壺形埴輪については、器高・底部形成等から、単独で樹立することを目的としたものであったのではないだろうか。また後者は、器台形埴輪とのセット関係の可能性から供献用として理解したい。(12)

壺形埴輪は、単口縁が主体を占めるようであるが、本古墳にも1点のみ、二重口縁と認識される破片が存在することは興味深い。(13)一般的に、二重口縁と単口縁の比率は、二重口縁

の比率が高い方が古い傾向にあるとされる。(14)このことから、本古墳の壺形埴輪は、胴部の長胴化からみても、壺形埴輪の最終段階とみてもよいのではないだろうか。他方、在地系（壺形）土器との相違点も指摘されている。(15)

② 器台形埴輪

器台形埴輪は、外方気味の胴部から、直口気味に立ち上がり、口縁端部が短く外反するものである。本古墳出土資料は破片であり、全体の器形は定かではない。(16)しかし、上述の目的で作成された可能性はあるのではないかと想定している。

③ 円筒形埴輪

円筒形埴輪は、口縁部が外反するものと、直口気味に立ち上がるものの両方が存在するようで、大きさにややバラツキがみられる点にその特色をもつ。器壁は若干薄手(17)であるものが主体を占める。しかし、内面調整等に他器種との差異は認められない。(18)

他方、本古墳出土の円筒形埴輪には、若干特異な点があることも指摘されている。(19)

5 埴輪の製作等について

本古墳から出土した埴輪は、いずれの器種の外面にも黒斑がみられることから、野焼き（横向きに寝かせて）により、焼成されたものと推測できる。

本古墳より先行する壺形埴輪等が出土している、福岡県小郡市三国の鼻1号墳においては、焼成後の色調で、赤褐色と黄褐色の二種類の壺形埴輪が存在することが報告されている。(20)つまり、埴輪外面に赤色顔料を塗布するのではなく、焼成後に赤褐色に仕上がることを想定して、埴輪に使用する粘土を選択しているということであろう。(21)

本古墳の場合は、赤色顔料を埴輪内外面に塗布(22)しているものが主体を占めるが、三国の鼻1号墳のように、埴輪に使用する粘土を精選した様子は認められない。

しかし、本古墳でも上述のとおり、形態的に相違点のみられる、二種類の壺形埴輪が存在し、用途の区別をしている可能性は否定できないのではないだろうか。

また、本古墳の埴輪製作については、在地系（成川式）土器と類似していない点等から、埴輪製作に関わったのであろう、工人が存在した可能性はあるのではないだろうか。(23)

6 築造年代について

今回の発掘調査において、上述のとおり（繰り返しになるが）、時期決定の指標となりえる須恵器、土師器、在地系土器等は出土していない。このため、年代推定についてはやや疑問が残るが、壺形埴輪の胴部長胴化、円筒形埴輪が存在する点等から、壺形埴輪の最終段階である、4世紀末から5世紀初頭と位置づけたい。

(1) 南北方向の前方部の途中部分ではあるが、北側に設定した7Tで根（基底）石を確認した。この根石付近が南北方向の噴端だと想定している。しかし、(測量図等から)前方部が低かったであろうことを考慮しても、2段目の根石の可能性は残る。他方、南北方向が急傾斜地という、瘦尾根状の自然地形を有効活用した築造方法で、外観（視覚）的に2段築成を表現した可能性もあるのではないだろうか。

(2) 始良カルデラの噴出物である、降下軽石を含む層であるため、流出しやすい特色をもつ。旧地形の南北

側が急傾斜地であることも含めて、外表施設である葺石は転落しやすい環境であった可能性はかなり高い。このため、南側の急傾斜部分（テラス面より以南）では、築造時の明確な葺石を検出することはできなかった。なお、増築（浴場）工事によって削平されている、前方部北西側の断面には、自然流出した可能性の高い葺石が観察できる。

- (3) 本古墳は瘦尾根状の自然地形を利用して、地山整形後、上面は盛土して築造されたと想定している。しかし、前方後円墳の前方部の築造に関しては、地山整形、盛土は大規模なものではなく、瘦尾根状という自然地形等の制限から、必要最低限の築造であった可能性は残る。このことは、上述の増築工事によって削平された、前方部北西側の断面からも想定できる。
- (4) 小牧古墳群1号墳では、地山整形後、盛土して築造された様子が工事によって削平された、墳丘断面で確認できる。小牧古墳群1号墳と本古墳は、時期差等はあるものの、築造のための立地・環境とも類似しているため、同様の築造方法であった可能性は高いと考えている。
- (5) テラス面は、ある程度（約70cm）の幅をもつが明確なものではなかった。しかし、その可能性は否定できないため上述した。さらに、このテラス面には、敷石痕、礫の集中箇所（壺形埴輪を樹立させるために使用される自然礫であり、福岡市老司古墳でも類例が報告されている。）、樹立痕（堀方）等は確認されていない。福岡市教育委員会『老司古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第209集 1989
- (6) 重量感のある壺形埴輪については、一見、朝顔形埴輪と判断（池邊千太郎氏御教示による。）可能な大型の個体も少数存在するが、壺形埴輪の範疇として取扱った。他方、宮崎平野における、ほぼ同時期の壺形埴輪は、壺形土器の系譜を色濃く反映する形態（底部形成等）が主体を占めるようである。
- (7) 器台として報告すべきであると考えているが、不確定要素があるため、「器台形埴輪」という名称を使用した。他方、壺形埴輪の範疇であるという指摘もある。
- (8) 円筒埴輪として報告すべきであると考えているが、不確定要素があるため、「円筒形埴輪」という名称を使用した。他方、壺形埴輪の範疇であるという指摘もある。
- (9) 発掘調査の時点でも、前方後円墳の前方部への追葬の可能性は指摘されていた。このことを踏まえて精査したが、追葬を想定させる遺構等の検出には至らなかった。なお、前方部の墳端は、そのほとんどの部分が既に消滅していたため、追葬の可能性は残るのではないだろうか。
- (10) 器台形埴輪については、先行する古墳と想定している老司古墳でも出土例があり、違和感はないと考えている。なお、老司古墳出土の器台は主体部で発見されており、供献用としての報告がなされている。他方、老司古墳の主体部から出土した器台は転用であり、本来は、壺形埴輪とのセット関係で使用された可能性も推測されている。
- (11) 壺形埴輪における底部拡張（粘土を二次的に貼付けて、外方へ突き出す）という形態的特徴は、老司古墳に類似していると考えている。さらに、壺形埴輪等の胴部内面に指ケズリ状の調整を施すことも、老司古墳との類似点であると思われる。
- (12) 重量感のある壺形埴輪内面の底部形成は、粗雑にやや厚い粘土を（二次的に）貼付した痕跡を残すものであるが、重量感のない壺形埴輪内面の接合部は、前者よりは丁寧な仕上げている雰囲気である。埴輪作成に使用目的が少なからず、影響している可能性は高いと考えている。
- (13) 二重口縁の壺形埴輪の作成は、単口縁の壺形埴輪より、やや複雑であるため、前者の方が重要な意味をもつ場所に置かれた可能性が指摘されている。
- (14) 田中裕二氏御教示による。二重口縁の壺形埴輪は、前方後円墳での使用例が数多く報告されているが、畿内型の前方後円墳が（全国的に）築造されなくなると、方墳、円墳にも使用されるようである。
- (15) 大西智和氏御教示による。本古墳出土の壺形埴輪の主な特色として、それぞれ、次の①～④ことが指

摘されている。① 比較的堅緻で部分的にミガキ仕上げがみられること。② 古墳時代を代表する在地系(成川式)土器の壺形土器と比較すると、各段に丁寧なハケがみられること。③ ケズリはみられるが器壁が薄くなるものではなく、簡易的なものであること。④ 円筒埴輪の調整にみられる、指ナデがみられることである。なお、在地系土器である成川式土器の壺形土器は、本古墳出土の壺形埴輪と比較すると、形態的特徴にも類似性は認められず、粗雑な印象の強いものである。

(16) 他古墳でみられるような透かしは認められないが、本古墳出土の器台形埴輪の推定器高は、概ね、25 cm程度であると考えている。

(17) 田中裕二氏御教示による。本古墳の円筒形埴輪は器壁が薄い点に特色を持つことから、福岡県鋤崎古墳、丸隈山古墳の円筒埴輪に類似していることが指摘されている。他方、宮崎平野を中心とする、ほぼ同時期の古墳から出土する円筒埴輪は、器壁の厚い傾向がみられるようである。

(18) いずれの器種の埴輪も、成形、調整技法、胎土等から時期差はなく、ほぼ同時期であると推測している。

(19) (15)に同じ。本古墳出土の円筒形埴輪の主な特色として、それぞれ、次の①、②ことが指摘されている。

① 円筒形埴輪の胴部に貼付くと考えられる、断面三角形の突帯の接合部分にミガキ調整がみられること。② 底部からかなり高い位置に、断面三角形の突帯が貼付けられる可能性はあるが、胴部に透かしがみられないことである。

(20) 小郡市教育委員会『三国の鼻遺跡Ⅰ』小郡市文化財調査報告書第25集 1985 なお、老司古墳でも「小型で全体的にシャープな造りを何わせ、胴部が卵型を呈し、最大径が上位にあるもの」と「大型で全体的に粗雑な造りを何わせ、胴部最大径が中位にあるもの」の二種類の壺形埴輪が存在することが報告されている。福岡市教育委員会『老司古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第209集 1989

(21) (20)に同じ。

(22) 壺形埴輪と器台形埴輪とのセット関係で使用されると想定されている埴輪、二重口縁の壺形埴輪、いずれも古墳の中で重要な意味をもつ場所に置かれた可能性はあると想定している。

(23) 形態的特徴等を含めた埴輪の受容については、ほぼ同時期の全ての古墳が規則性をもって、そのまま受け入れるのではなく、古墳毎に選択的受容された可能性は指摘されている。このことから、形態的特徴が部分的にデフォルメされた埴輪も存在するのであろう。なお、本古墳出土の壺形埴輪は、改めて言うまでもないが、はじめから樹立目的の埴輪(底部開放)として製作されたと考えている。

(参考文献)

福岡市教育委員会『老司古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第209集 1989

小郡市教育委員会『三国の鼻遺跡Ⅰ』小郡市文化財調査報告書第25集 1985

大分県教育委員会『勘助野地遺跡』中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書(I) 1988

九州古文化研究会『古墳発生期前後の社会像』—北部九州及びその周辺地域の地域相と諸問題—田中裕介

「九州における壺形埴輪の展開と2・3の問題」発表資料 2000

大分県考古学会『おおいた考古』7 池邊千太郎「大分市松岡所在の小牧山古墳群について」 1995

南日本文化研究所叢書(大学・研究所等紀要 2001/26,105-118) 大西智和「鹿児島県における埴輪の導入とその意義」

報告書抄録

ふりがな	いいもりやまこふん					
書名	飯盛山古墳					
副書名	国民宿舎ダグリ荘建設工事に伴う発掘調査報告書					
巻次						
シリーズ名	志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書					
シリーズ番号	第29集					
編著者名	小村美義					
編集機関	志布志町教育委員会					
所在地	〒899-7192 鹿児島県曾於郡志布志町志布志二丁目1番1号 0994-72-1111					
発行年月日	平成13(2001)年3月31日					
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	市町村コード-遺跡番号				
		北緯°'〃	東経°'〃	調査期間	調査面積	調査原因
いいもりやまこふん 飯盛山古墳	かごしま 鹿児島県 そお 曾於郡 しぶし 志布志町 ちようむた 帖字牟田	68-157 131° 08' 28	31° 27' 37	平成10年 10月21日~ 平成11年 2月3日	約250㎡	国民宿舎 建設事業 に伴う発 掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
飯盛山古墳	墳墓	古墳時代 縄文時代	葺石	壺形埴輪 円筒形埴輪 器台形埴輪 円筒土器他		

写真図版



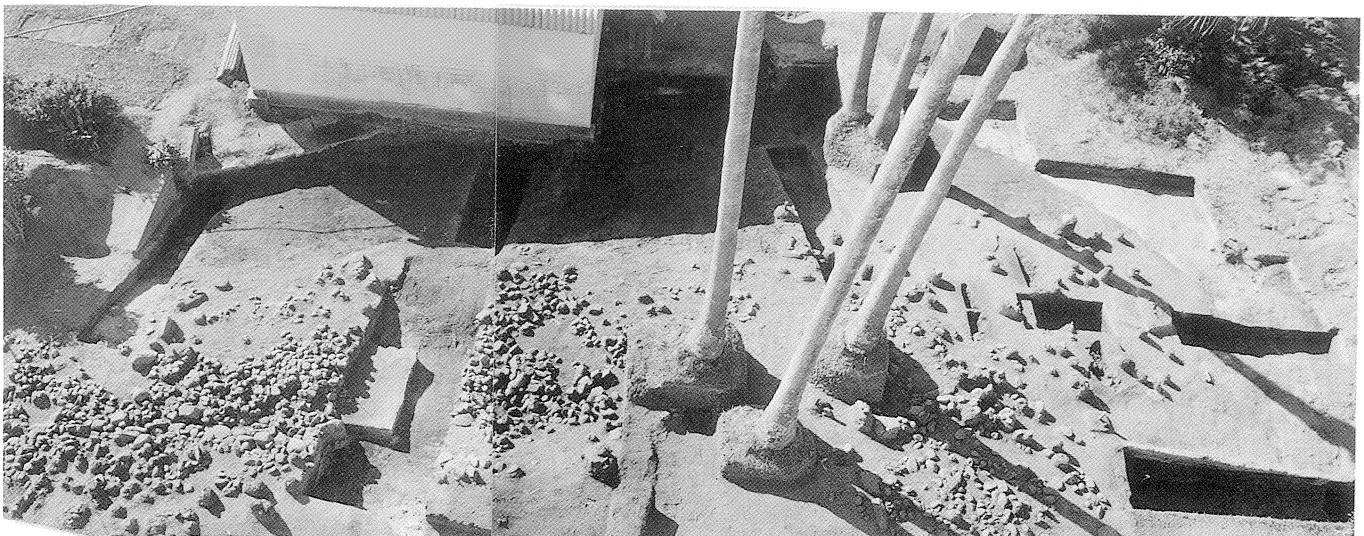
古墳遠景(東から)



古墳遠景(西から)

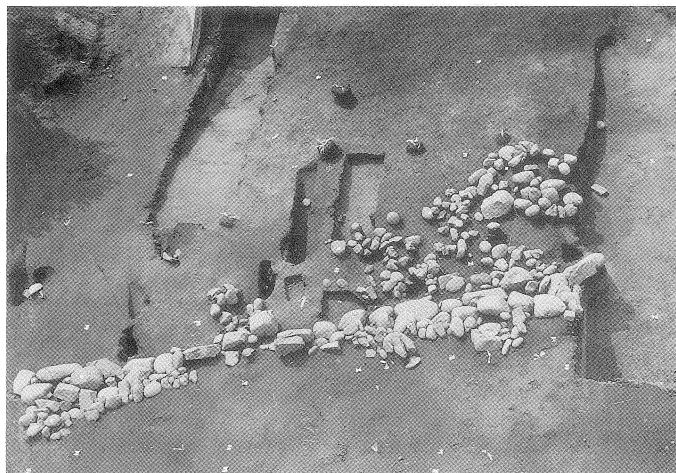


葺石検出状況(選定前/北から)

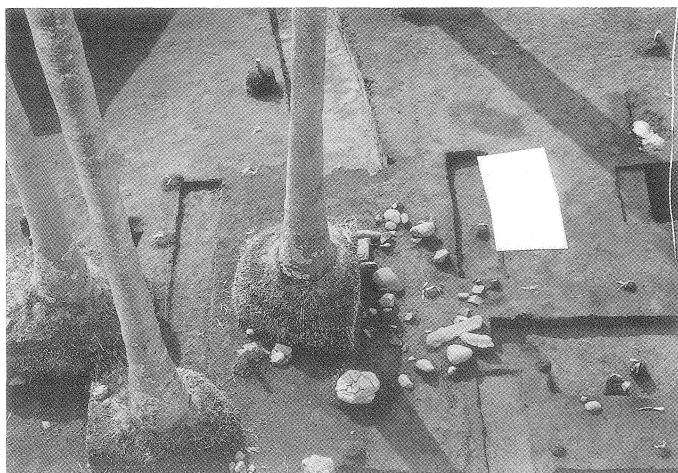


葺石検出状況(選定中/北から)

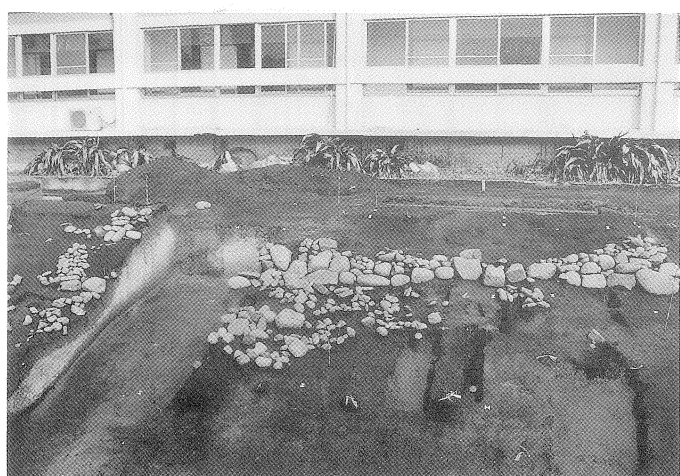
図版 2



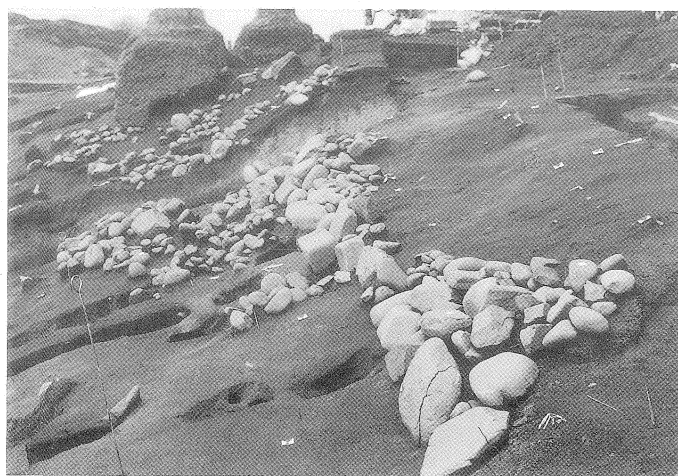
根石列検出状況(北から)



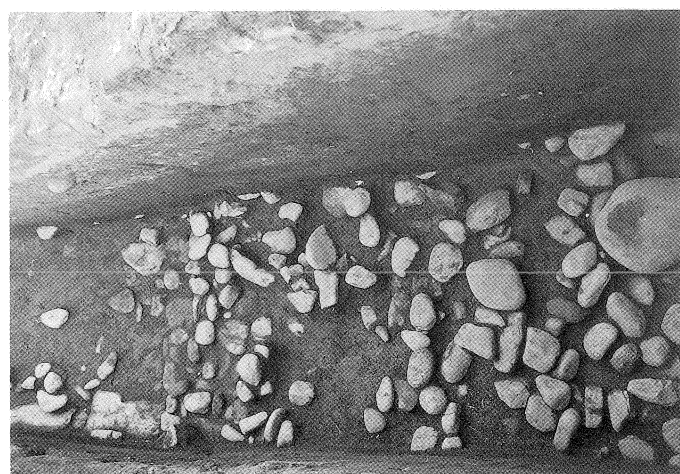
ミニトレンチ設定状況(北から)



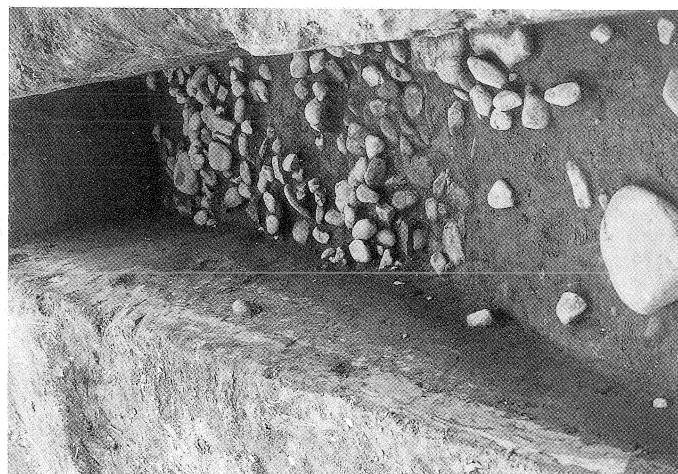
根石列検出状況(南から)



根石列検出状況(東から)



7トレンチ(南から)



7トレンチ(北から)



1



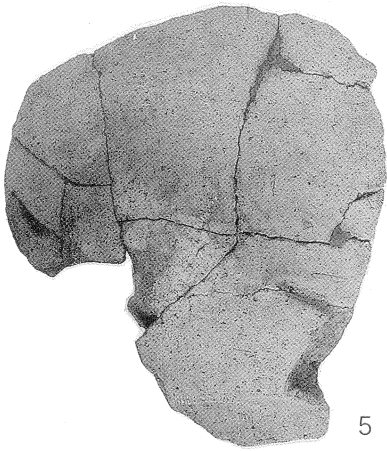
2



3



4



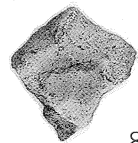
5



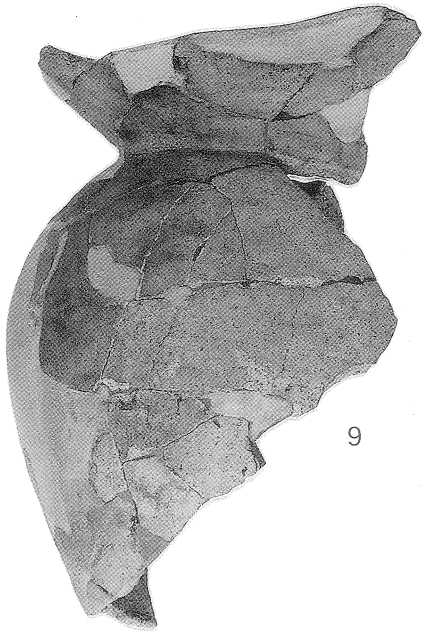
6



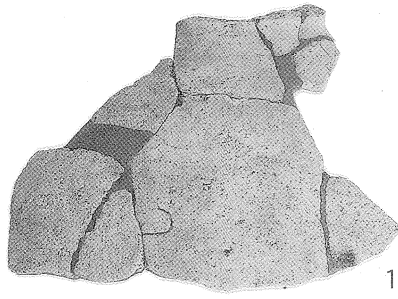
7



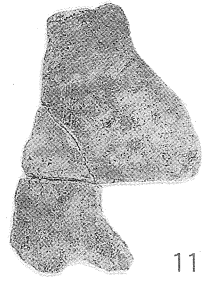
8



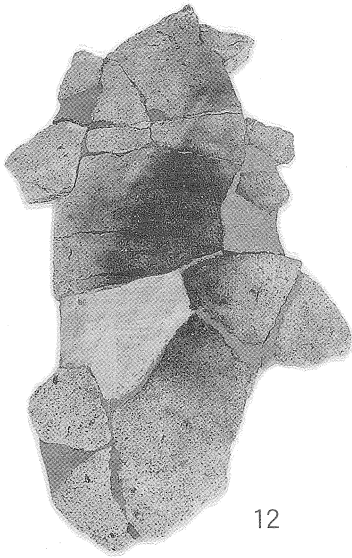
9



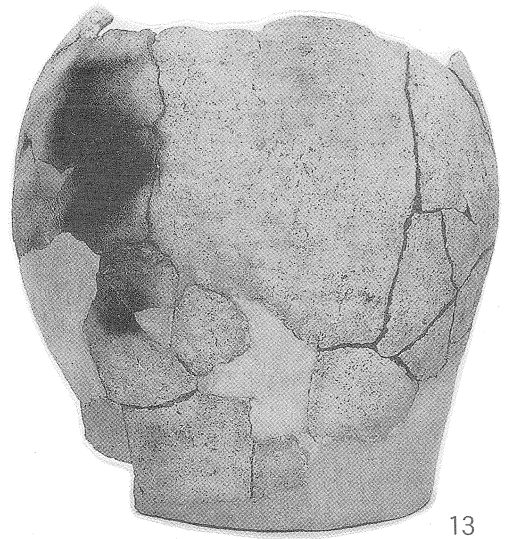
10



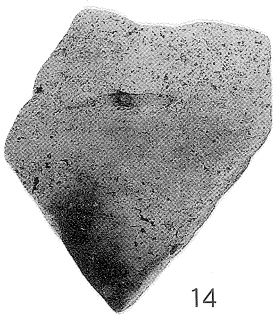
11



12



13



14



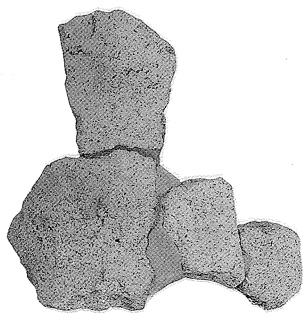
15



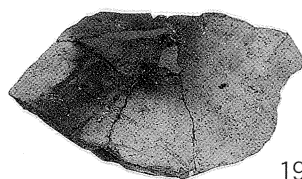
16



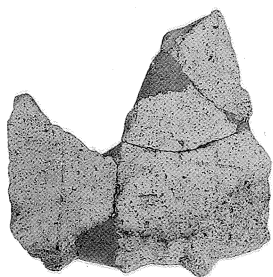
17



18



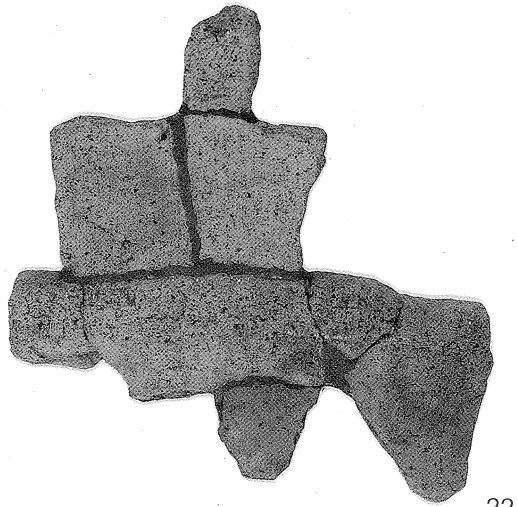
19



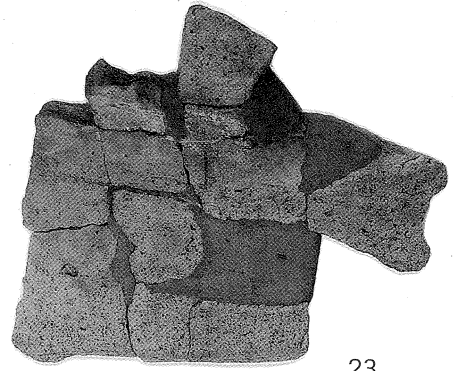
20



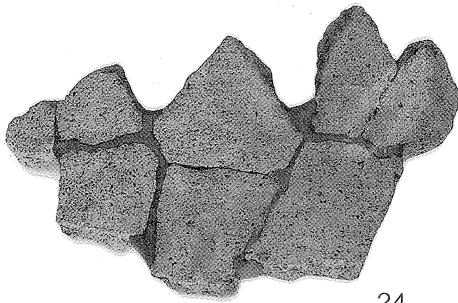
21



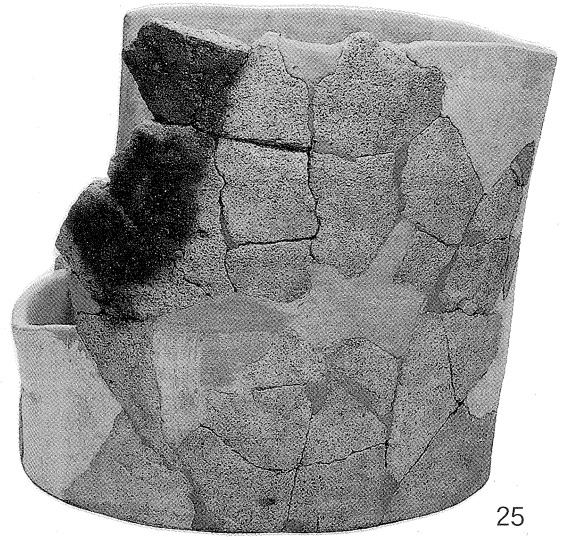
22



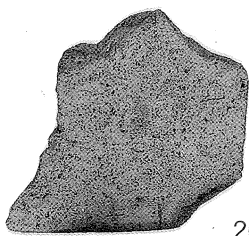
23



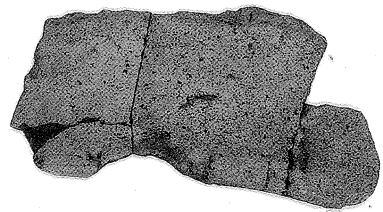
24



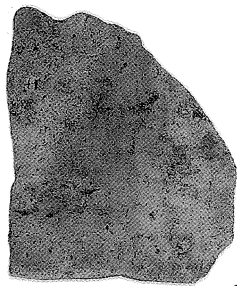
25



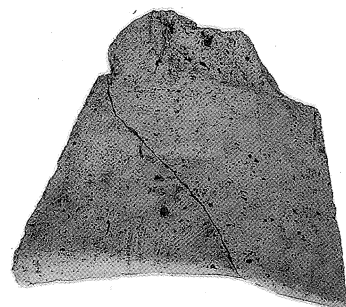
26



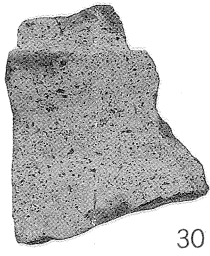
27



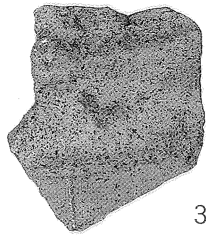
28



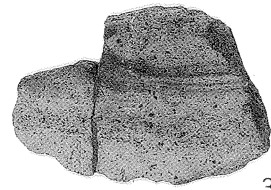
29



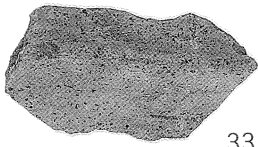
30



31



32



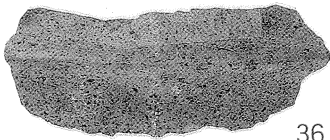
33



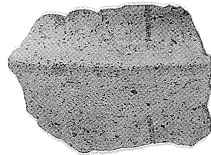
34



35



36



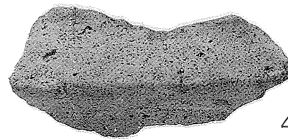
37



38



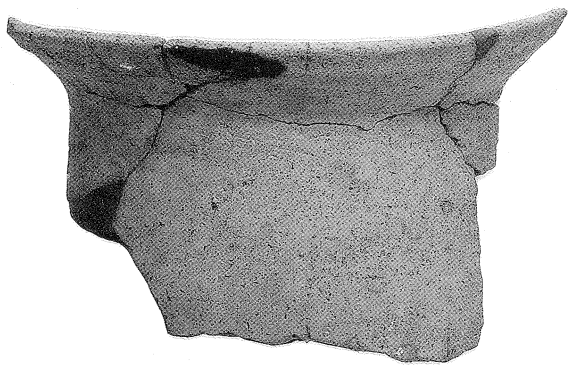
39



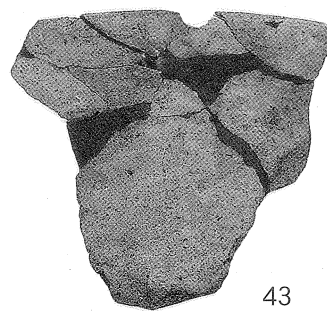
40



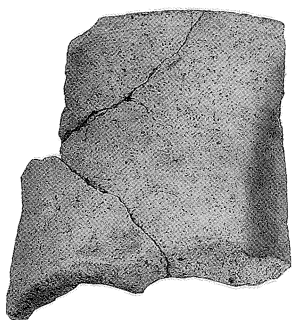
41



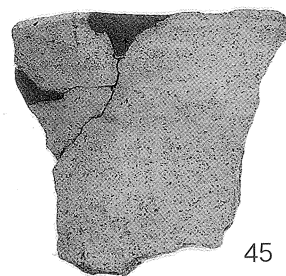
42



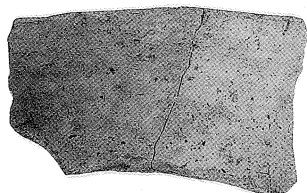
43



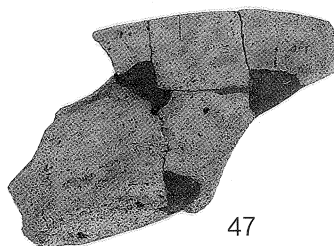
44



45



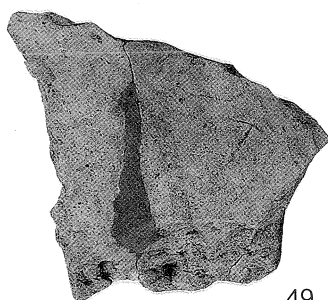
46



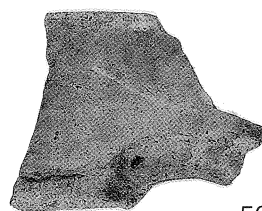
47



48



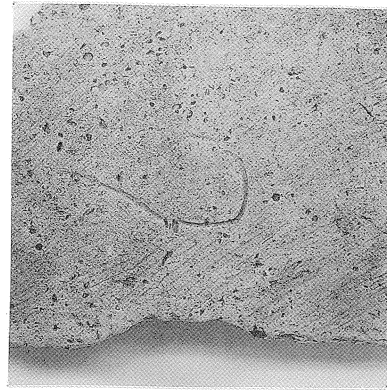
49



50



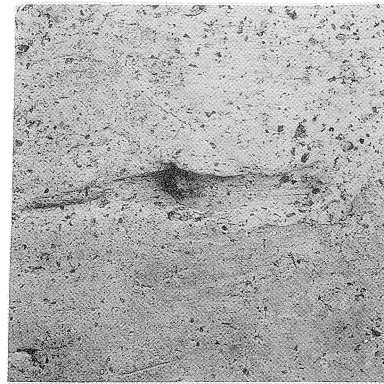
10 拡大



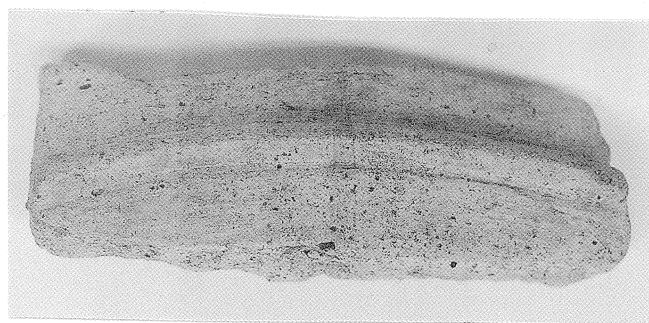
押圧痕拡大(実測図掲載なし)



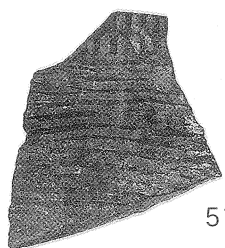
12 拡大



14 拡大



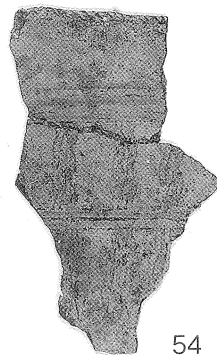
16 拡大



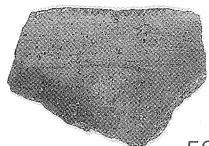
51



53



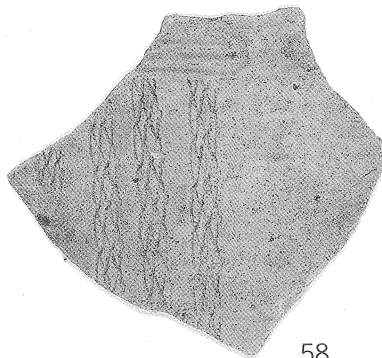
54



52



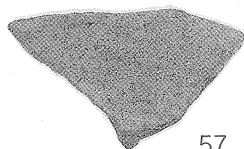
55



58



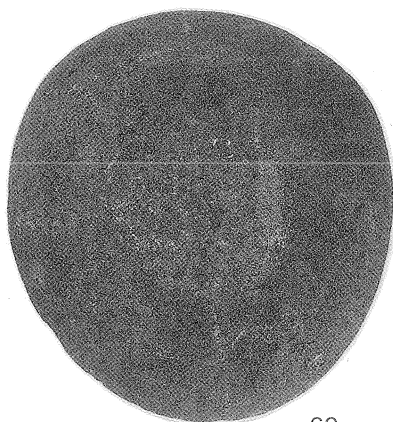
56



57



59



60



61



62